昭和42年3月24日国鉄局特別
昭和40年3月8日第三種郵便物認可(5日、20日発行)

☆帝国主義国、植民地従属国、「労働者国家」
三ブロック階級闘争を
世界プロ独一世界共産主義の勝利へ！
共産主義者同盟（戦旗派）

戦旗

5月5日
5日、20日発行
第349号
編集発行人　鹿島　昇
一部100円
購読料10回1,200円（〒共）

戦旗社
品川郵便局私書箱6号
電話03（782）1830
振替　東京176133

インドシナ革命の前進に呼応し

5・15 戦犯天皇一族訪沖阻止 海洋博粉砕に決起せよ

全国の同志諸君／革命的労働者・学生諸君！　ベトナム・カンボジア人民の武装民族解放闘争に於ける英雄的闘いは今、最後的・決定的・歴史的勝利をその手に握らんとしている。この春期大攻勢に於ける圧倒的勝利は現代過渡期世界の歴史的趨勢を何人も認めざるを得ないものとして明らかにした。すなわち国際階級闘争ープロレタリア革命の歴史的、最後的勝利の確信と、帝国主義の危機と死滅の不可避性である。この事は同時に日本労働者階級に抑圧民族としての歴史的負債の血債にかけた闘い、すなわち国際階級闘争に於ける任務、自国（日本）帝国主義打倒の完遂を一層せまるものとしてあるのである。真にドラスティックに展開する現下の情況の中に於いて帝国主義が植民地支配の力量を喪失しつつも、最後的延命をかけて絶望的侵略反革命をなさんとしている時、とりわけ日本帝国主義が朝鮮植民地化攻撃をその命運をかけてなさんとしている時、今こそ我々は「闘うアジア人民と連帯し侵略反革命を攻撃的国内階級激突戦へ」という戦略的総路線を断固として推進し革命党・革命勢力建設に邁進しなければならない。

インドシナ人民の勝利と連帯し、日帝打倒に進撃せよ

又ベトナムに於いても臨時革命政府ー解放戦線軍は十七日にディクアンを解放し、二十一日にはスアンロクを制圧ー解放し、サイゴンに三〇キロとせまり、サイゴン総攻撃は数日の内の問題となっているのであり、そして四月二一日遂にチューは辞任を明らかにし、十年に亘るチューー反共軍事独裁政権はベトナム人民によって打倒されたのである。

我々は一九六〇年十二月の南ベトナム民族解放戦線結成、一九七〇年二月のカンブチア民族統一戦線結成以来のベトナム・カンボジア人民の米帝国主義ー反共軍事独裁政権に対する、英雄的・革命的な不屈の武装民族解放闘争の偉大な勝利に対して限りない連帯を明らかにしなければならない。

この武装民族解放闘争が歴史上最強と謂われた米帝国主義と真向うから対決しこれを放逐して克ち取られた勝利である時その革命的意義は一層歴史的重要性を刻印しているのである。

一九六二年二月の米帝・ケネディーによる南ベトナム援助軍司令部設置を契機とした米帝国主義による、その総力を挙げた反革命攻撃、とりわけ空軍によるベトナム全土に渡るジュウタン爆撃、とりわけナパーム弾を雨の如く落す事をもつて全土を焦土化せんとし、又化学兵器、生物兵器を使用する事をもつて人間として存在する事自体を不可能とする攻撃、又一九六四年八月の「トンキン湾事件」デッチ上げによる北爆の開始、ハノイ、ハイフォンの爆撃として、米帝国主義のほこる一切の軍事力ー近代兵器を投入し、一九六八年の最大時五四万という兵力を投入した武装民族解放闘争に対する圧殺の一切を粉砕し軍事的にも打ち勝ち、かかる戦略的総路線に基づき、我は七・三〇沖縄海洋博攻撃ー天皇・皇太子訪沖を日本労働者階級の必須の絶対的任務として粉砕する事、との事を何度も明らかにしてきた。

今五・一五闘争を海洋博粉砕ー天皇・皇太子訪沖実力阻止の巨大な爆発の橋頭堡として何がなんでも克ちとらねばならない。現下の情勢はその事を一層要求しているのである。この事をはつきりと見ておかなければならない。

その事の第一は、今春季に於けるベトナム・カンボジア人民の圧倒的勝利である。

今春期に於けるベトナム・カンボジア人民の大攻勢は留まる事を知らぬ進撃を続け、遂に四月十七日午前クメールルージュ軍はプノンペン市内に突入し、大統領官邸、国防省を始めとして全市を完全に制圧ー解放し、最終的にカンボジア全土を解放するという偉大な勝利をその手中にしたのである。

3・26解放軍、旧ユエ王宮殿突入

今号の内容

5・15沖縄解放闘争に総決起せよ!!　一～四頁
撤7・20、戦犯天皇一味の沖縄上陸阻止へ武装進撃せよ!!　五頁
インドシナ民族解放戦争の前進に応え、日帝打倒の戦略的反攻へ!!　八～九頁
朝鮮人民との連帯をめざし、入管闘争の革命的飛躍を克ち取れ!!　十二～十六頁

米帝をベトナムから放逐したのである。

武器に於いては圧倒的に不利でありつつも米帝ーチューー反革命軍に対して、全ゆる戦術を駆使して闘い抜いた不屈の闘い、武装民族解放闘争の勝利なのである。

次に我々はベトナム・カンボジア人民の闘いが、インドシナに於ける解放勢力の団結を基礎とし、帝国主義者ー反共軍事独裁政権や又ソ連共産党等による「平和共存」を粉砕し、戦後世界体制の崩壊を自からが切り拓き、「後進国」武装民族解放闘争の歴史的位置を常に堅持して勝利した事をはつきりと見ておかなければならない。

帝国主義の植民地支配による徹底した収奪に対して、とりわけ農民に対する収奪に対して、土地革命の解放区による推進を基礎として対決し、農民の解放勢力への結集を克ちとり、反共軍事独裁政権による帝国主義支配の強制に対して民族解放をかかげ闘い抜いた闘いは、チュー、ロン・ノルの帝国主義の軍事的・政治的・経済的な全面的支配によるカイライ政権ー反共の防波堤を打ち破り、同時にソ連共産党の「非資本主義的発展の道」なる「後進国」革命の否定、民族ブルジョアジーへの依拠と「平和共存」への繰り込みを打ち破るものとしてあつたのである。

ベトナム革命に歴史的衝撃を受け、米帝のクーデターによる反共軍事独裁政権の成立による「非同盟中立」の破産を、「武装民族解放闘争を軸とし、反帝国主義・カイライ政権打倒として闘い抜く事をもつて「後進国」＝植民地従属国に於ける革命の方向を明らかにし戦後帝国主義世界体制の崩壊を切り拓くものとしてあつたのである。

真にその事は、米帝の北爆に対して六八年一月テト攻勢で応え、米帝国主義との全面的対決をベトナム人民が軸となつて闘い、その事を基礎に一九七〇年四・二四インドシナ人民首脳会議による北ベトナム、臨時革命政府、ラオス愛国戦線、カンブチア民族統一戦線の武装民族解放闘争の意義の確認とインドシナに於ける米帝の放逐とインドシナ政権の打倒を克ちとり、インドシナ全域の解放を克ち取る事の確認として明らかにされた。

真にそうであるが故に米帝の敗北的局面に於ける北爆停止をもつてする、米帝のインドシナへの残留と南北分断の固定化ー民族解放闘争の封じ込めや又ソ連共産党、中国共産党のそれへの屈服に対して七一年七・一九北ベトナム労働党「ニャシザン」による「おぼれる強盗に浮き袋を貸す」という批判や一九七三年一・二七パリ「和平協定」に対しても、前進の為の「妥協」として位置付け闘い抜いたのである。

実際、インドシナ全域にはりめぐらされた解放勢力の軍事網こそがベトナム・カンボジアの勝利をかちとつたのである。

七四年十・八の臨時革命政府の「協定違反者チューを打倒せよ」という檄、十二月二九日の臨時革命政府とカンボジア王国連合政府の共同声明をもつて開始された今乾期大攻勢は、カンボジアに於いてはラオス米大使館の引き上げ、四・一のロン・ノルの国外逃亡として、又ベトナムに於いてもクアン寺派を始めとする仏教徒の決起、サイゴンを先頭とする軍の反乱として内部崩壊までしたチューの辞任、米大使館の引き上げとしてその最後的勝利を数日の内に克ちとらんとしている。

そしてこの勝利はラオスでの新たな闘い、タイでの闘いとインドシナに於いて一層拡大せんとしている。

真にインドシナ全域から米帝がたたき出されんとしているのである。

我々はこのベトナム・カンボジア人民を先頭とするインドシナ人民の英雄的な闘いの勝利が、あの一・二七協定をめぐつて、「ベトナムは終つた」「裏切り」一般、「ベトナムは終つた」とした部分や、「帝国主義の強さ」一般を強調した部分のまつたく誤つた認識を粉砕したものである事、つまり我が過渡期世界論ー戦略的総路線の正しさを証明したものとしてある事を確認しなければならない。

つまり①帝国主義の不均等発展による帝国主義間対立の激化、②しかしその事をストレートに戦争に転化できない要因として、③「労働者国家」の群としての登場があり、④したがつて帝国主義は植民地支配をその存在の絶対的条件として強化する、⑤しかしながらその植民地支配が「後進国」の一切の矛盾を解決しないどころかそれを一層拡大するが故に、⑥土地革命を解放区としてなし、民族解放として帝国主義植民地支配と対決する闘いを必然化し、その闘いが唯一「後進国」の現実的矛盾を解決しえるが故に、民族解放闘争は歴史的趨勢として世界的に拡大してゆくのである。⑦この事によつて帝国主義は後一市場の崩壊、植民地支配の崩壊として根底的危機へ突入していくのである。我々はこの現実に立脚した戦略的総路線ー帝国主義の二重の危機を民族解放闘争との結合をもつて帝国主義足下に於いて日帝打倒として転化しなければならない。

日帝の侵略反革命の環、朝鮮・沖縄支配を粉砕せよ

ベトナム・カンボジア人民の武装民族解放闘争の勝利は戦後帝国主義世界体制の崩壊ー帝国主義の危機を一層明らかにした。

就中日帝にとつてはその延命の道を絶たれつつも絶望的侵略反革命を遂行せざるをえないという中にあつて、米帝ー日帝はその絶望的巻き返しの環を沖縄ー朝鮮としてすえんとしている事を我々はつきりと見ておかなければならない。

第七艦隊のベトナム沖への登場や沖縄米軍基地の強化を見ればそれは明らかなのである。

かかる米帝の圧倒的後退とその危機に比して日帝にとつてはアジアが自己の生命線であるが故に一層その危機は深刻なのである。

春期大攻勢の真只中に於いて崩壊の危機に瀕するチューに対して、九〇億円の援助を送り、臨時革命政府が三・三〇に「日本政府のチューへの緊急援助はベトナム人民の闘いへの敵対行為であり、その誤つた政策の結果に対する責任はすべて日本政府が負わなければならない」と明らかにした如く、ベトナム人民への本格的攻撃を開始し、又宮沢外相が訪米し①日米安保反革命同盟の堅持を確認し、②核問題の意志統一（これを受けて二三日の自民党合同会議で「有事核もち込みを確認した」）、③六九年日米共同声明の〝韓国条項〟「韓国の安全は日米にとつて緊要」である事を再確認し、④三木の訪米、十月天皇訪米を確認したのである。

この事は日「韓」定期閣僚会議の五ー六月再開を日帝がすでに明らかにしている事を見ても明らかな如く、帝国主義間矛盾の激化の中に於いて、日帝にとつて、原料、市場の確保をアジアに求めざるをえず、自己の支配圏としてアジアを確保しない限り日帝のその成立の根拠を失なつてしまうのである。そうであるが故に米帝とは異つて日帝には絶対に引く事のできないものとしてアジア侵略反革命の本格的（軍事的）推進をなすのである。

この事の環として沖縄ー朝鮮が日帝にとつて一層不可欠の環として、絶対的なものとしてあるのである。米帝をもつてしても敗北せざるをえなかつた、インドシナ人民の武装民族解放闘争を日帝が圧殺しうる力量を当然にも持ちえないが故に一層沖縄ー朝鮮は日帝にとつて重大なものとしてあるのである。

この事は右翼構改の諸君の様に帝国主義が自動崩壊していくという事では決してなく、帝国主義は危機になればなる程その牙をむきだしにして侵略反革命ー他民族抑圧を行なう事の証左としてあるのであり、ましてやあの社会排外主義＝反革命カクマルの如く、「米帝再介入に支援翼う日帝」、「日帝は後方支援の任を果たす」「インドシナ戦争の第三者として〝アジア地域協力＝アジア・フォーラム構想〟の盟主としての登場」と徹底して日帝の侵略反革命を否定し、帝国主義の侵略反革命が地域協力であるとする徹底した日帝擁護化論に落ち入り、「韓国条項を再確認する事は日帝にとつて得策でない」と自らが帝国主義の意志を代弁してやつているのである。

そしてベトナム人民の闘いに対しては「米帝とハノイはただサイゴンの交渉政権の旗色をめぐつて軍事的、外交的がけひきを行なつているにすぎない」（引用はすべて「解放」三六二号）としてベトナム人民の死をかけた武装民族解放闘争をかけひきして圧殺するのである。

かかるカクマルは帝国主義変質論により本質的に反革命化し、帝とスタの取り引きによつて一切の矛盾が解決され、したがつて侵略反革命を一切否定し、協力として美化し、朝鮮への植民地化攻撃も「外交攻勢」としてしか映らないのである。

この底しれぬ祖国擁護派に転落しきつたカクマルを解体しなければならない。と同時にカクマルの平和主義に染まりきつた頭をのり越えて帝国主義と階級闘争は進んでいるのである。「世界経済過程の現状と動向」として経済主義、客観主義を全面化している日向一派＝カクマルの共同反革命論もかかるカクマルと同一無二である。

真に日帝の沖縄ー朝鮮を自己の生命線として絶望的侵略反革命を遂行せんとする中にあつて日帝ー朴体制の強化は絶対的なものとなつてきているのである。

日帝の日「韓」定期閣僚会議再開という朝鮮植民地化攻撃ー南北分断固定化攻撃の再度の本格化を唯一の柱とする朴はインドシナ人民の勝利、南北の革命戦争による統一という現実に恐怖し、とりわけ十四年ぶりという朝鮮民主主義人民共和国の金日成主席を初めとした軍指導部を含む人代表団の訪中と金日成の「分裂された祖国を統一する人民の闘争は、世界的に行なわれている反帝民族解放闘争の重要な一環である」、「南での革命を座視しない」という発言、中国の支持という朝鮮に於ける革命運動ー南北革命統一に向けた動きに対して、自己の危機感を一層深化し、日帝ー朴体制の強化を軸に南朝鮮人民の決起に対して再度の弾圧を開始したのである。

「人民革命党」関係の徐道源氏らの上告を棄却し、その翌日の九日には死刑を執行するという許しがたい暴挙を行なつた。

又学生の闘いに対しては四月八日高麗大学に対して大統領緊急措置第七号を発令し、一時閉鎖、学内集会の禁止を行ない、軍隊を出動させ弾圧体制をしいたのである。

又日帝との結合の下に刑法を改悪し、在日「韓」国人の言動に対しても「外患の罪」を設置せんとしているのである。

そして朴の訪米を明らかにし、日帝ー朴体制を軸とした日米「韓」臨戦体制を強化せんとしているのである。

かかる朴の弾圧の強化にあつても南朝鮮人民の闘いは緊急措置七号に抗議し、軍隊と闘い抜いた延世大二千学生を始め、東亜日報労働者等とその闘いの炎は決して消す事はできないのである。

真に、ベトナム・カンボジア人民を先頭としたインドシナ人民の勝利は同時に帝国主義の危機として発現し、かかる中に於いて日本帝国主義は安保反革命同盟の再編強化と沖縄ー朝鮮をその生命線としつつインドシナをもふくむ本格的侵略反革命を絶滅的にしかけんとしている。

この事に対決し抜き、これを革命的内乱ー蜂起・内戦ー世界革命へ転化するのかどうなのかとして、一切の基軸があきらかにされているのである。

アジア人民の闘いに対して、日帝打倒による結合を抜きにして帝国主義抑圧民族としての血債は一切空語である。

党ー革命勢力を強化し沖縄解放闘争に進撃せよ

インドシナに於ける革命戦争の勝利と、引きだされた日帝の危機の中に於いて日本労働者階級人民の任務は一層重大なものとなつている。

就中我が同盟（戦旗派）と蜂起ープロ独派の階級的任務は巨大である。我々はこの事を重大な決意のもとに完遂しなければならない。

すでに明らかにした如く日帝はその成立の根拠を植民地支配として求めていかざるを得ず、にもかかわらずそれが、民族解放闘争ー反日闘争としての爆発を導くが故に、それを圧殺する軍事力をもたねばならず、しかしあの米帝をしても敗北した現実は日帝に何の根拠もない侵略反革命を強いているのである。

かかる中にあつてその唯一の根拠を国内支配のボナパ反革命＝暴力支配へもとめざるをえず、国民の天皇制イデオロギー＝民族排外主義への全面的動員として侵略反革命戦争を承認させ、沖縄の反革命的統合をなし、朝鮮植民地化を完遂しそれを自己の生命線とする以外展望はないのである。

日帝の一切の矛盾を労働者階級人民、とりわけ被抑圧民族、被差別大衆に徹底して転化し、その事をもつて差別・分断支配を強行せんとしているのである。

そして今七五春闘に於いても現われた如く企業防衛ー国家防衛を徹底して宣伝・強化し、排外主義への動員をなさんとしているのである。

この事の環として天皇の政治過程への登場、天皇制イデオロギーによる国民統合をなさんとし、天皇・皇太子の訪沖、天皇の訪米を強行せんとしているのである。

又四月一日の坂田防衛庁長官のポスト四次防の準備の司令として侵略反革命軍としての自衛隊の強化は進行しているのである。

日帝の現在的危機と、国内支配体制ー侵略反革命体制の構築はボナパ反革命＝強権的・暴力的推進は必然的に、急激な階級分解を強いるのであり、「革命か反革命か」が現実的、実際的に進行していくのである。

真に現在進行する我が革命的左翼に対する集中的弾圧は、日本革命の基軸たる我々の戦闘策動なのである。

今こそ党と革命勢力の団結と武装を断固として防衛・強化し、革命の現実性を主体的に創出してゆかねばならないのである。

我が同盟（戦旗派）はこの任務を断固として推進する。

我が同盟（戦旗派）建設以来の共産同ー革命的左翼の政治的・理論的再検討の闘いを目的意識的に組織し、第一次ブントの世界革命をめぐる日共との分岐の革命的意義を継承し、これを運動的に継承した第二次ブントの意義と限界を第一次ブント、第二次ブントが応え切れなかつた、レーニン主義の軸たる組織と戦術問題を全人民の党としての観点から応えきり、革命党建設と階級闘争指導をなし切り、日本革命に進撃する。

かかる我が同盟（戦旗派）は五から逃亡し、カクマルに屈服した日向一派を我が同盟（戦旗派）の階級的責任に於いて必ず最後の一兵まで解体しつくす。

かかる党と革命勢力の推進を通して我々は社会排外主義＝社・共カクマルと徹底して対決してゆかねばならない。この粉砕を抜きにして日本革命の現実性も切り拓けないのである。

かかる中に於いて五・一五闘争のもつ意味は重大である。

その第一は、七・二〇沖縄海洋博粉砕、天皇・皇太子訪沖実力阻止の爆発を断固として克ち取る事である。

七三年沖縄「返還」による反革命的統合の一大攻撃としての海洋博攻撃は沖縄を「基地と石油と『貧しい春観光の島』」と化し、日帝の最前線基地として構築する戦略目的をもつたものとしてなされんとしているのである。それは沖縄人民に対して更なる抑圧を強いるものとしてあるのである。

四月十九日のキャンプ・ハンセンの米兵による女子中学生に対する暴行として米軍の沖縄人民に対する抑圧と共に日本人による〝貧しい春観光〟として沖縄人民に対する抑圧は強化されんとしている。

そして同時に大日本民族主義への沖縄人民の同化＝「天皇の臣民」への強制としてあるのである。

我々は沖解闘を始めとした海洋博粉砕の反日暴動を断固として支持・連帯し、大和人としての血債にかけ海洋博粉砕ー天皇・皇太子訪沖実力阻止を現地実力闘争として闘い抜かなければならない。

日帝の朝鮮・アジア侵略反革命の一大拠点として建設せんとする一切の攻撃を粉砕し、沖縄人民の沖縄解放闘争と日本革命を闘う我我の重大な軸として海洋博粉砕現地実力闘争を五・一五沖縄ー「本土」を貫いてその火柱を挙げなければならない。

第二に朝鮮人民の不屈の決起を断固として受けとめ、日帝の朝鮮植民地化攻撃粉砕ー南北分断固定化阻止ー南北革命統一支持の闘いとして、上程されんとする入管法を日本労働者階級の責務にかけて粉砕しなければならない。

そして日帝の延命の環として、日帝ー朴体制強化の軸として五ー六月に再開されんとする日「韓」定期閣僚会議を絶対に粉砕しなければならない。

第三に今秋十・二天皇訪米実力阻止の巨大な機関車として五・一五闘争は貫徹されなければならないのである。

全ての革命的労働者人民諸君！今ベトナム・カンボジア・朝鮮人民の血によつて切り拓かれた革命の現実性を我々は抑圧民族の血

ダナン解放／3・31解放軍の入城

海洋博・皇太子訪沖を怒りの火柱で焼き尽せ

決死戦闘貫徹に向け総進撃せよ

全国で闘い抜く反帝戦線戦士諸君！革命的労働者人民の皆さん！

帝国主義は武装して進撃する人民の大攻勢の前に、最後のあえぎを開始した。日米の帝国主義者共は、沖縄の反革命軍事拠点としての永続的打ち固めを至上命令として、人民への未曾有の攻撃を集中して来ている。日沖人民の武装決起は、最早誰も押し止どめることはできない。「七・二〇海洋博開催」は目前である。革命的たらんとする党と人民にとつて、海洋博決戦の爆発を避けて前へ進むことはできず、真正面からこれを迎え撃ち、勝利せねばならない。

我々の勝利への確信は、増々強固な、増々鮮明なものとなつている。「七・二〇」が決戦であり、それが勝利することの根拠は、まず何よりも、全世界の革命的労働者階級と被抑圧人民の大攻勢が切り拓いた国際階級闘争の新局面の中に求められねばならない。

帝国主義の植民地支配体制は雪崩を打つて瓦解し、戦後の世界支配に君臨してきた米帝は、没落と破滅を全世界に晒け出している。追いつめられ、あせりを深める帝国主義者共の、最後の最も野蛮な策動を粉砕し、勝利することは、国際主義的プロレタリア人民の最大の任務となつている。

そして、勝利の確信の第二は、軍事カイライ政権を次々と打倒し、歴史的勝利を戦いとりつつあるインドシナ人民、「反日・朴打倒、南北革命統一」めざして闘い続ける南朝鮮人民、そしてパレスチナ、アラブ人民の不抜の戦列の存在から与えられる。帝国主義とその手先共の、革命的人民への拷問と虐殺、あらん限りの暴虐も、決して人民の闘いを圧殺し去ることはできない。死をも恐れぬ人民の決起、この現実は、帝国主義にとつて絶対的死の宣告に他ならない。まさに我々は、プロレタリア世界革命勝利の不退転の決意を我がものとし、「闘うアジア人民と連帯し、日帝の侵略反革命を革命的内乱・蜂起＝内戦へ転化せよ！」の戦略的総路線で武装し、「海洋博決戦」に勝利せねばならない。

そして、日米両帝国主義にとつて、沖縄が朝鮮南北分断固定化をメルクマールとしたアジア支配の最後的布陣の中枢であることから、ものとして日帝打倒の現実性を何としても切り拓かねばならない。

働者人民の公然たる登場が、力強く開始されたことである。

そして何よりも、我が日本反帝戦線が、敵権力の組織壊滅策動を突破し、日和見主義、排外主義、合法主義と決然と訣別し、七五年階級闘争に、その武装せる雄姿を登場させたことである。沖縄派兵決戦の最頂点を画した五・一三武装遊撃戦への、敵による大量の投獄、放火罪適用という前代未聞の大弾圧も、我々をうち鍛えこそすれ、我々の思想と決意を揺がすことはできなかつた。六七年以来の血の滲む死闘を切り拓いたプロレタリアート魂は、「安保＝沖縄決戦」の成果と教訓の上に立つて、血債の思想に裏打ちされ、増々革命的に打ち鍛えられてきた。帝国主義者共は、日一日と自らの支配階級の座が脅やかされつつあることに恐怖し、「上からの内乱」に突つ走り、アバート・ローラー、全国指名手配、デッチ上げ弾圧という、革命派壊滅攻撃に出てきている。しかし、闘つて闘つて勝ち抜く事、この思想と精神こそ、被抑圧人民の闘いとその勝利が、我々に指し示しているのだ。遂に我々の全思想が実践的に試される時がきたのだ。

今日の日向一派の目に余る排外主義的腐敗と合法主義的堕落は、我々の苦闘の対極に生み出されたものに他ならない。組織は、自らを純化することによつてのみ、真に革命的になりうるのである。

全ての反帝戦線戦士と革命的人民は、海洋博決戦の爆発と勝利へ向け、全ゆる犠牲を恐れず、総力を振りしぼつて起ち上がらねばならない。我々の任務の第一は、天皇・皇太子の訪沖を何としても実力阻止することである。日帝「国際慣例」を持ち出し、「海洋性進取性気風」を煽りたて、「守礼の美徳」を引つぱり出し、「過去を忘れろ」と怒号して、沖縄人民を侵略反革命に以きずりこまんと奔走している。我々がもし、戦犯天皇とその子たる皇太子の訪沖を許し、「ひめゆりの塔」「健児の塔」の前に立たせるならば、我々は再び、沖縄人民に対する重大な裏切りを犯すことになる。七・二〇「本土」＝沖縄を貫く武装決起で、天皇・皇太子訪沖を阻止せよ！

第二に我々は、海洋博粉砕！天皇・皇太子訪沖実力阻止！の闘いを、全ゆる場所で訴え、全人民のものとして行かねばならない。全ゆる「沖縄闘争終焉論」者を粉砕し、五・一五首都総決起を一大飛躍点として、七・二〇へ向け、闘いの火柱を打ち立てて行かねばならない。

そして、第三に我々は、決戦勝利に向け、今すぐに組織的・軍事的・思想的準備にとりかからねばならない。闘いの勝利は、党と革命勢力が打つて一丸となり、戦闘体制を打ち固めることなしにはありえない。戦闘団主義やカンパニア主義は必ず権力に解体され、屈服せざるを得ないのである。

我々は、沖縄解放闘争の歴史的飛躍と日本革命の新地平獲得をめざし、海洋博決戦を貫徹することを明らかにし、全ての革命的な労働者、学生、市民、帝国主義打倒をめざす全ての皆さんが共に起ち上り闘われんことを強く呼びかけるものであります。

我が同盟（戦旗派）＝蜂起・プロ独派はその最先頭に立ち切る。全ての諸君が、我が同盟（戦旗派）＝蜂起・プロ独派に結集し、五・一五の巨大な爆発を克ち取り、党と革命勢力の総力をかけて、七・二〇海洋博粉砕へ驀進せよ。

闘争スケジュール

5月初旬　三里塚援農・現地集会
5月7日　東峰十字路裁判闘争　一時千葉地裁
5月10日　海洋博粉砕実行委集会
5月15日　沖縄解放闘争　六時桧町公園
5月17日　「天皇・皇太子訪沖訪米阻止、海洋博粉砕」日本反帝戦線総決起集会　六時中央労政会館
5月18日　東拘実力糾弾闘争　十二時東綾瀬公園
全狭連結成集会
六時亀戸勤労福祉会館

7・20戦犯天皇一味の沖縄上陸阻止へ武装進撃せよ

日本反帝戦線

全国各地で、プロレタリア解放に向け闘い抜いている蜂起＝プロ独派の革命的同志諸君！全ての戦闘的労働者、学生、高校生、市民の皆さん！沖縄解放をめざし、善闘する沖縄人民の皆さん！

一九四五年の十数万沖縄人民を虐殺した沖縄戦、五二年の「サンフランシスコ条約」発効、七二年の反革命統合、これらの全ての歴史は、沖縄人民の耐え難い苦痛の歴史であり、日本労働者人民にとつては、裏切りと腐敗の歴史であつた。そして「一九七五年七月二〇日」、この日は、沖縄人民の運命と、日本労働者人民の国際主義的飛躍の如何を決する日となつた。

我が日本反帝戦線は、革命的プロレタリアート十有余年の歴史と、血の滲む第三次ブント建設の不抜の成果を賭け、「海洋博粉砕＝戦犯天皇・皇太子訪沖実力阻止！海洋博決戦勝利！」に突き進む、不動の決意を持つ。[illegible]人民が我々と共に闘いを決意し、戦闘体制を建設し、闘いに決起される事を強く呼びかける。

我々の攻撃目標は、戦犯天皇とその子皇太子、美智子の沖縄上陸を何としても阻む事に、集中して設定されなくてはならない。天皇ヒロヒトとその一族こそ、沖縄戦の張本人であり、今再び、沖縄人民を、釣魚台略奪を第一歩とした侵略反革命戦争へ引きずり込まんとしている、最も厚顔で最も残虐な、全人民の敵である。

天皇一味の訪沖を実力阻止するか否かは、我々日本労働者人民が、己れの帝国主義的抑圧民族としての負の歴史を血債し、排外主義的腐敗と闘いきれるかどうかの歴史的な一大分岐点である。海洋博決戦を前にした現在、全ゆる日和見主義や中間主義は、プロレタリア国際主義への歴史的な背信に繋がり、闘う全世界のプロレタリア階級と帝国主義の暴虐と闘い続ける被抑圧人民に対する、最も重大な敵対となる。

我々は、日本帝国主義が強いた、沖縄人民とアジア人民の流血と殺りくを憎み、血の叫びを己れのものとする時、我々が闘つて血を流し、生命を絶とうとも、どうしてそれを恐れる事ができようか。闘いは武装して闘われなくてはならない。我々は、敵が絶望的な危機にのたうちまわり、最後の最も暴力的なあがきを開始している事を忘れてはならない。日本反帝戦線は、ここに最も厳選された献身的な中核突撃隊を先頭にして、如何なる敵の報復も恐れることなく、全面的な戦闘に突入する重大決定を下した事を、不屈の確信と誇りをもつて明らかにすることができる。全ての革命的人民、そして労働者人民の未来を担わんとする革命的青年は、自らを革命戦士として打ち鍛え、戦闘に志願し、武装部隊の一翼を担い切らねばならない。

今こそ、我々は燃え上がる「戦犯天皇決死銃弾！海洋博爆砕！」の沖縄人民の闘いに応え、「安保粉砕＝沖縄解放＝日帝打倒！」の旗の下、日帝打倒＝米帝放逐＝沖縄解放！へと大進撃をかちとらねばならない。日米の両帝国主義は、ベトナム、カンボジア人民の歴史的勝利の前に、決定的に追いつめられた。絶望的危機に瀕する帝国主義者共は、南朝鮮人民への更なる拷問と虐殺、そして侵略反革命前線基地＝沖縄の植民地的な差別軍事支配確立へ向け、死活を賭けた一大攻撃へと突つ走り、天皇一味の訪沖を、そして訪米を企て、日米安保同盟を基軸とした侵略反革命戦争体制の構築を、必死になつて策動している。

海洋博決戦の勝利は、戦略的反攻戦の一大突破口であり、「十・一天皇訪米爆砕武装決起」への道でもある。労働者人民が排外主義を実践し、被抑圧人民と連帯し、公然と武装を決意した時、帝国主義者とその手先共や番犬達の総ビリビリズムが始まる。既に敵は、天皇・皇太子の訪沖が爆砕されるという最高の屈辱を前に、我が反帝戦線戦士六名を逮捕するという事前弾圧を開始した。我々は、この暴挙を許すものではない。敵の反革命には、それに倍する革命の嵐をもつて応えるのがプロ魂だ。

七五年は、決戦の年であり、蜂起＝プロ独派の大前進の年となるに違いない。プロレタリア世界革命の輝しい未来と共産主義の勝利を闘いとるため、全ての人民は武装し、海洋博決戦に勝利せよ！

三里塚 鉄塔死守決戦に向け、春期戦闘体制を打固めよ!!

全国の同志諸君！日本反帝戦線三里塚現闘団より五月連続援農闘争への結集を要請します。

ベトナム・カンボジアを先頭とするインドシナ人民の大攻勢、朴反革命独裁政権の暴力的強権的大弾圧にも屈せず反日（帝）・反朴闘争を決死の覚悟で闘い抜く南朝鮮人民、全世界を揺がす植民地・従属国人民の闘いの前に敗走を続ける帝国主義者、就中米帝はアジアからの全面的後退を強いられ、そうであるが故に、全世界的危機の延命を計らんとする日帝は、東南アジアへ向けた侵略反革命を暴力的に展開せんとしている。

日帝のアジア侵略反革命＝南朝鮮植民地化攻撃に対して、私達は闘うアジア人民と連帯し、日帝の侵略反革命＝国内侵略反革命体制づくりと全面対決し、暴力的に日帝を打倒しなくてはならない。

かかる現代過渡期世界のドラスティックな展開に呼応し、我々の決意を打ち固めて侵略反革命の拠点として建設されんとする三里塚が、空港を何としても阻止せねばならない。

昨年末から本年にかけて政府＝公団は、数度に亘る「開港宣言」の破産を何とか隠蔽せんとし、暴力的に農地を略奪し、農民の苦闘をあざ笑うかのように大型機械力をもつて作物を破壊し、表面的には「開港」へと一歩前進したかの様に装つた。

にもかかわらず、現地反対同盟の闘いに相乗され、関連事業周辺住民、就中芝城県鹿島・神栖両町議会における「ジェット燃料輸送反対」決議によつて鹿島の燃料タンク建設、鹿島から土浦（千葉県）までの貨車輸送は、まつたくの空論と化し、かくして「鉄塔破壊」の法的根拠も導くことが出来ずにいるのである。

この周辺住民の闘いと同時に、いやそれ以上に現地三里塚は、敵政府＝公団の攻撃をはねかえし闘い抜かれている。

二月末三月時の二期工区（用地内）工事着工に対する闘いは、反対同盟を主軸とし連日闘い抜かれ政府＝公団の杭打ちに対して全体重をかけて闘いが貫徹され、敵が杭を打てば、その夜のうちに杭が切り倒され、公団＝警察権力は、夜も眠れない始末であつた。

現地三里塚の闘いとは、かかる内容として、つまり「守る闘い」から「攻撃の闘い」として展開され、擬装的ではあれ「完成した空港施設」を守るのに必死なのが今日の政府＝公団の姿なのである。

十年に亘る長期間の闘いを、全体重、全生活を賭けて闘い抜いている反対派の農民、生涯に亘る闘いとして「農業問題」を含みつつ「空港絶対反対」を貫ぬく農村青年＝青行隊の苦闘に今こそ連帯し、我々の突出した闘いをもつて結合しなくてはならない。

第一次決戦、第二次決戦において、農村の特殊性を有効に生かし権力を逆包囲し、東峰十字路戦闘においては、機動隊三名を壊滅する体大な成果を結実化し、「九・一六闘争」の地平を防衛・強化し、住民、就中芝城県鹿島・神栖両町議会における「ジェット燃料輸送反対」決議闘争として三里塚第三次決戦、「空・港絶対反対」の闘いを、敵が絶望的な危機にのたうちまわり、最後の最も暴力的なあがきを開始している事を忘れてはならない。日本反帝戦線は、ここに最も厳選された献身的な中核突撃隊を先頭にして、如何なる敵の報復も恐れることなく、全面的な戦闘に突入する重大決定を下した事を、不屈の確信と誇りをもつて明らかにすることができる。全ての革命的人民、そして労働者人民の未来を担わんとする革命的青年は、自らを革命戦士として打ち鍛え、戦闘に志願し、武装部隊の一翼を担い切らねばならない。

今こそ、我々は燃え上がる「戦犯天皇決死銃弾！海洋博爆砕！」の沖縄人民の闘いに応え、「安保粉砕＝沖縄解放＝日帝打倒！」の旗の下、日帝打倒＝米帝放逐＝沖縄解放！へと大進撃をかちとらねばならない。日米の両帝国主義は、ベトナム、カンボジア人民の歴史的勝利の前に、決定的に追いつめられた。絶望的危機に瀕する帝国主義者共は、南朝鮮人民への更なる拷問と虐殺、そして侵略反革命前線基地＝沖縄の植民地的な差別軍事支配確立へ向け、死活を賭けた一大攻撃へと突つ走り、天皇一味の訪沖を、そして訪米を企て、日米安保同盟を基軸とした侵略反革命戦争体制の構築を、必死になつて策動している。

海洋博決戦の勝利は、戦略的反攻戦の一大突破口であり、「十・一天皇訪米爆砕武装決起」への道でもある。労働者人民が排外主義を実践し、被抑圧人民と連帯し、公然と武装を決意した時、帝国主義者とその手先共や番犬達の総ビリビリズムが始まる。既に敵は、天皇・皇太子の訪沖が爆砕されるという最高の屈辱を前に、我が反帝戦線戦士六名を逮捕するという事前弾圧を開始した。我々は、この暴挙を許すものではない。敵の反革命には、それに倍する革命の嵐をもつて応えるのがプロ魂だ。

七五年は、決戦の年であり、蜂起＝プロ独派の大前進の年となるに違いない。プロレタリア世界革命の輝しい未来と共産主義の勝利を闘いとるため、全ての人民は武装し、海洋博決戦に勝利せよ！

北原氏、市議選勝利の地平を拡大せよ

我が反対同盟は、敵政府＝公団の暴力的組織解体策動に呼応し、「劣勢」と言われた「北原市議選」勝利をもぎとつた。

保守系候補は、とより、日共までが「早期開港」を唱えるなかで、唯一「空港絶対反対」「空港による生活破壊・環境破壊を許さず緑と大地を守り闘おう」のスローガンをかかげ成田市内を反対同盟を最先頭にかけめぐり圧倒し、我々の総力を成田市民はもとより、敵政府＝公団に見せつけた。

「金と欲」の市議会に、我々は、北原事務局長を送りこむことによつて戸村委員長の市議会二期の闘いの地平を継承し、議会をも「空港絶対反対」の闘いの場として闘い抜く決意を固めている。

成田市内を蠢かす「空港絶対反対」のコーム、数万枚のビラの弾丸、反対同盟を主軸とする分農平一丸となつてもぎとつた勝利と我々の力を今こそ第三次決戦に結集しなくてはならない。

全ての同志、友人諸君！決戦体制を打ち固め、強固な体制で援農闘争を貫徹せよ！

今こそ農民の怒闘を我がものとし、全体重を傾注し三里塚現地に結集せよ！武装闘争として三里塚第三次決戦、「空・港絶対反対」の闘いを、敵が絶望的な危機にのたうちまわり、最後の最も暴力的なあがきを開始している事を忘れてはならない。日本反帝戦線は、ここに最も厳選された献身的な中核突撃隊を先頭にして、如何なる敵の報復も恐れることなく、全面的な戦闘に突入する重大決定を下した事を、不屈の確信と誇りをもつて明らかにすることができる。全ての革命的人民、そして労働者人民の未来を担わんとする革命的青年は、自らを革命戦士として打ち鍛え、戦闘に志願し、武装部隊の一翼を担い切らねばならない。

今こそ、我々は燃え上がる「戦犯天皇決死銃弾！海洋博爆砕！」の沖縄人民の闘いに応え、「安保粉砕＝沖縄解放＝日帝打倒！」の旗の下、日帝打倒＝米帝放逐＝沖縄解放！へと大進撃をかちとらねばならない。日米の両帝国主義は、ベトナム、カンボジア人民の歴史的勝利の前に、決定的に追いつめられた。絶望的危機に瀕する帝国主義者共は、南朝鮮人民への更なる拷問と虐殺、そして侵略反革命前線基地＝沖縄の植民地的な差別軍事支配確立へ向け、死活を賭けた一大攻撃へと突つ走り、天皇一味の訪沖を、そして訪米を企て、日米安保同盟を基軸とした侵略反革命戦争体制の構築を、必死になつて策動している。

海洋博決戦の勝利は、戦略的反攻戦の一大突破口であり、「十・一天皇訪米爆砕武装決起」への道でもある。労働者人民が排外主義を実践し、被抑圧人民と連帯し、公然と武装を決意した時、帝国主義者とその手先共や番犬達の総ビリビリズムが始まる。既に敵は、天皇・皇太子の訪沖が爆砕されるという最高の屈辱を前に、我が反帝戦線戦士六名を逮捕するという事前弾圧を開始した。我々は、この暴挙を許すものではない。敵の反革命には、それに倍する革命の嵐をもつて応えるのがプロ魂だ。

七五年は、決戦の年であり、蜂起＝プロ独派の大前進の年となるに違いない。プロレタリア世界革命の輝しい未来と共産主義の勝利を闘いとるため、全ての人民は武装し、海洋博決戦に勝利せよ！

沖縄現地武装決起への血路を切り拓く

7・20海洋博粉砕・皇太子沖縄上陸阻止!!

米兵の沖縄女学生・ホステス暴行糾弾

沖縄人民四千の決起に応え 4・28闘争の爆発を克ち取る

全国の戦闘的労働者の皆さん！

海洋博粉砕沖縄！「本土」実行委呼びかけによる「四・二八米海兵隊の沖縄女学生・ホステス暴行糾弾、海洋博粉砕、天皇・皇太子訪沖阻止、沖縄解放、インドシナ！朝鮮人民連帯」集会を、二〇〇名の戦闘的労働者、学生、高校生、革命的沖縄人民と共に、首都を完全制圧して闘い抜いた報告を提起していきたい。

まさに四・二八の闘いは、七二年「返還」以降、全面的に、太和排外主義に屈服し「沖縄は終った」として逃亡を開始した、諸党派の腐敗・頽落を乗り越え、七五年海洋博を目前にした沖縄解放闘争の一大突破口として闘い抜かれた。

今日、沖縄では、四月十九日の米海兵隊員による二女学生暴行、そして次の日にもホステスに対する暴行が続発し、沖縄人民の怒りがまさに空前の規模で燃え上つている。先日の金武岳（通称ブート岳）の米軍実弾演習実力阻止闘争と相呼応し四千名もの沖縄人民が圧倒的に決起し反軍・反基地闘争へと大きく登りつめんとしている。かかる反軍・反基地闘争の一大高揚こそ日帝が、「沖縄振興開発計画」～海洋博によつて明らかにした「平和産業の育成！観光立県」「工業立県」なる欺瞞性を満天下にさらけ出すものである。まさにいかに、日米帝国主義が基地の存在を、いかなる粉飾をこらして隠蔽しようとも、決して沖縄人民の怒りは消えることはなく、ますます激烈化することをいやという程、帝国主義に思い知らせているのである。

「本土」にあつては、かかる、米海兵隊、「本土」労働者の暴行を裏付けるかのように、「週刊サンケイ」を突破口に、「週刊文春」「プレイボーイ」と続々と沖縄女性差別記事が「夜の海洋博」と銘打つて大々的にキャンペーンが繰り広げられ沖縄を一大「買春」基地として宣伝せんとしている。我々は、かかる日帝の沖縄の女性差別攻撃を断じて許すことはできない。当日の集会において、沖縄連、全都女性解放研は、かかる日帝の攻撃をはつきりと見抜き、三・二三沖縄女性問題シンポジウム、「週刊文春」糾弾闘争の闘いを軸に、日帝の海洋博攻撃の内実を暴き、断乎として、海洋博粉砕闘争へ決起するという力強い決意表明が展開され、結集した全ての同志諸君から「異議ナシ」と熱烈な拍手で確認された。

日帝は、朝鮮植民地化攻撃を増大し、在日朝鮮人民の一切の闘いを解体し、もつて差別攻撃への屈服を強要せんとし、他方沖縄にあつては、海洋博を軸に「海洋性進取性」なる「民族性」を鼓舞し、そして農漁業を破壊し沖縄人民に滅民化を強要し、太和排外主義への屈服をとりつけアジア侵略反革命戦争への全面的な動員をなしきらんとしている。まさにそうであるが故に、名誉総裁皇太子の海洋博への臨席を通じ、天皇制・天皇制イデオロギー攻撃を貫徹せんとしているのである。だがしかし沖縄人民にとつてまさに、天皇・皇太子こそ、あの沖縄決戦において、多くの沖縄人民の命を奪い沖縄差別を貫徹させた責任者であることは言うまでもなく、この皇太子・天皇の臨席こそ、許すことのできない暴挙なのである。そうであるが故に、沖縄において現在、戦犯天皇糾弾闘争が、全沖縄を揺り動かし今まさに、海洋博粉砕への闘いと結合せんとしているのである。四・二八闘争における、沖縄問の発言は、まさしくかかるものとして戦犯天皇糾弾も海洋博粉砕を闘い抜かなければならないという提起がなされた。

我々は、日帝の釣魚台略奪を通じ沖縄人民を排外主義に縛り込み沖縄解放闘争の解体を計らんとする野望を、はつきりと把え返し、そのことが、まさに「本土」階級闘争の弱さとして自己批判し、断乎とした、海洋博粉砕！安保粉砕！沖縄解放闘争の一大火柱を、なんとしても、打ち立てなければならない。かかる闘いの貫徹こそ、「本土」プロレタリアートの自己批判であることを、何度も何度も確認しなければならない。闘う沖縄人民と徹底して連帯し、天皇・皇太子の訪沖阻止！海洋博粉砕闘争を、自らの死をも賭して闘い抜くのか、それとも、沖縄人民の闘いを日帝に売り渡すのか否か、がまさに問われているのである。我々は、「三年前にどうして来てくれなかつたのか」という沖縄人民の糾弾をはつきりと受けとめ、七五年七・二〇を圧倒的な赤ヘル部隊を現地に登場させ、海洋博爆砕の実力武装闘争を勝利的に克ち取らねばならない。

当日発言に立つた日本反帝戦線の同志は、その戦列を昨年、五・一五～七・二〇沖縄本部現地闘争の闘いを通じ、着々と克ち取つているという、権力にとつては、身の毛もよだつ報告がなされ、七・一九～二〇天皇・皇太子訪沖絶対阻止、海洋博粉砕の一大決戦に断乎として勝利するという決意表明がなされ、拍手がうえにも、海洋博粉砕闘争へ向けた決意が熱つぽく会場をおおい拍手と「異議ナシ」のシュプレヒコールが高々と響きわたつた。

そしてまた全国労共闘の同志からは、労働運動の排外主義的頽落と腐敗の現状が暴露され、現在、東交九・三〇処分撤回共闘を軸としたる戦闘的東交青年婦人労働者によつて展開されている第二次再建合理化攻撃に対する闘いの報告がなされ、差別排外主義と対決する革命的労働運動の創出は、まさに、沖縄人、部落民、「障害者」、女性、朝鮮人民との連帯抜きにはありえないことが明らかにされた。

そういつた中で、海洋博攻撃を許すとともに、「本土」労働者の帝国主義への屈服を意味するものでしかないことが提起され、海洋博粉砕闘争に死力を尽して闘い抜くという決意表明がなされた。

四・二八闘争が、かかる海洋博粉砕闘争へ向けた突破口であることが、全闘争参加者によつて確認され、〝七・二〇は現地で〟という相言葉を最後に戦闘的デモを展開していつたのである。

当日、海洋博粉砕！沖縄解放闘争の闘いがまさに権力に肉迫する闘いであるが故に、敵！権力機動隊は、大量の機動隊動員をもつて我々の闘いに対する弾圧を行なつてきた。幾重にも重なつた敵権力の青い壁を突破し、海洋博粉砕闘争の突破口にふさわしい果敢な ジグザグデモを、二時間半にも及ぶ長時間展開し抜いたのである。その間二〇〇名の部隊は、権力機動隊の並進規制をはねのけ、かつちりとスクラムを組み最後まで戦闘的デモンストレーションを貫徹し抜いたのである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

同志六名不当逮捕

全九州！山口海洋博粉砕実行委4・27～29連続闘争を貫徹（詳細次号）

4・19蜂・プロ派の総力をかけ、朝鮮連帯闘争に大進撃を確認

四・一九朝鮮人民蜂起十五周年日「韓」闘僚会議粉砕総決起集会は、労働者、学生、高校生、九〇名の強固な結集をもつて、立教大学においてかちとられた。

この四・一九集会は、わが蜂起！プロ独派が、党！革命勢力の全力量をかけて朝鮮連帯闘争！七〇年代後半明階級闘争を闘い抜く基本的方向性の下にかちとられたのである。つまりそれは、第一に、我々が朝鮮連帯闘争の決定的たちおくれを自己批判し、七・七華青闘告発の意義を受けとめ、日帝の朝鮮植民地化攻撃の激化と、入管体制の強化に、歴史的血債をかけて闘い抜くことの確認である。第二には、朴のベテン的国民投票における敗北とベトナム、インドシナ革命の勝利による植民地支配体制の崩壊と根底的危機の中で、六月日「韓」闘僚会議をもつての日帝！朴体制の強化、日帝の侵略反革命戦争政策と入管法国会上程、外国人登録法改悪策動との闘いである。第三に日帝の侵略反革命と侵略反革命体制構築に向けた国内支配体制のボナパルティズム的転換に対決し、朝鮮連帯闘争を、日本階級闘争の基底に、アジア侵略反革命に向けた沖縄の反革命的統合、海洋博強行、天皇・皇太子訪沖、天皇訪米策動を実力で粉砕する闘いを組織することである。

そして第四に、朝鮮連帯闘争の歴史的高揚に向けて具体的に在日朝鮮人民の闘いに学び、支持・連帯・防衛の闘いを、実践することであり、そのことを通して日朝人民の革命的団結に向けた闘いを日常的に貫徹することである。さらに第五に、南朝鮮階級闘争の高揚のなかで、日向一派が人民戦線派四トロの下に闘争への排外主義的介入を画策していることに対して日向一派が、部落解放闘争、沖縄解放闘争の否定と情算のうえでの課題の乗り移り的「闘い」でしかないこと、しかも日帝の朝鮮植民地化攻撃を「全韓国の馬山化」という民族抑圧を欠落させた日帝美化論でしかないことを見すえ、社会排外主義者日向一派を、粉砕することである。

以上の闘う方向性の下に、四・一九集会は、まず最初に、日本反帝戦線菊地議長代行から基調的な提起がなされた。

菊地同志は、現在のベトナム、インドシナ革命の勝利と朴のベテン的国民投票の破産が帝国主義！植民地支配体制の破産の表現であり、植民地従属国人民の民族解放闘争の勝利と前進こそ国際的階級闘争の高揚の開始であることを最初に明らかにした。そして、そのような中で日帝！朴体制の強化、日「韓」闘僚会議、入管法、外国人登録法改悪策動を全力をかけて阻止し、「朝鮮植民地化攻撃粉砕、日帝！朴体制打倒、南北革命統一」をめざして朝鮮人民との連帯をかちとる闘いを本格的に強化することを明らかにした。そしてその闘いを現在の社共、カクマル、日向人民戦線派の排外主義的腐敗を打ち破り、七・七華青闘告発の意義をしつかりと打ち固め、さらに東交反合決戦を先頭とした国際主義で武装する労働者人民、日帝の侵略反革命体制をつきくずしつつある沖縄解放闘争、部落解放闘争と強固に結合し、七五年春季闘争を闘い抜くことを提起した。

日本反帝戦線からの基調提起につづいて高橋共闘からの朝鮮連帯闘争に向けた決意表明がなされた。高橋共闘からの発言は、現在の高校教育における民族排外主義教育を徹底的に糾弾し、南朝鮮における、四月十二日ソウルでの私立信一高校生五百名の決起にみられるように、朴カイライ政権に対して決起する南朝鮮人民の闘いに連帯し、六月日「韓」闘僚会議粉砕、大管体制粉砕に向け高校生の最先頭で闘い抜くという決意表明がなされた。

発言は次に全国労共闘からなされた。労共闘の同志は、今日の日本労働者人民の排外主義的頽落を突破し、東交反合決戦を突破口に、日向一派が人民戦線派四トロの下に闘争への排外主義的介入を画策していることに対して、「社会排外主義者日向一派を、粉砕することである。

歴史的高揚に向けて具体的に在日朝鮮人民の闘いに学び、支持・連帯・防衛の闘いを、実践することであり、そのことを通して日朝人民の革命的団結に向けた闘いを日常的に貫徹することである。さらに第五に、南朝鮮階級闘争の高揚のなかで、日向一派が人民戦線派四トロの下に闘争への排外主義的介入を画策していることに対して日向一派が、部落解放闘争、沖縄解放闘争の否定と情算のうえでの課題の乗り移り的「闘い」でしかないこと、しかも日帝の朝鮮植民地化攻撃を「全韓国の馬山化」という民族抑圧を欠落させた日帝美化論でしかないことを見すえ、社会排外主義者日向一派を、粉砕することである。

以上の闘う方向性の下に、四・一九集会は、まず最初に、日本反帝戦線菊地議長代行から基調的な提起がなされた。

菊地同志は、現在のベトナム、インドシナ革命の勝利と朴のベテン的国民投票の破産が帝国主義！植民地支配体制の破産の表現であり、植民地従属国人民の民族解放闘争の勝利と前進こそ国際的階級闘争の高揚の開始であることを最初に明らかにした。そして、そのような中で日帝！朴体制の強化、日「韓」闘僚会議、入管法、外国人登録法改悪策動を全力をかけて阻止し、「朝鮮植民地化攻撃粉砕、日帝！朴体制打倒、南北革命統一」をめざして朝鮮人民との連帯をかちとる闘いを本格的に強化することを明らかにした。そしてその闘いを現在の社共、カクマル、日向人民戦線派の排外主義的腐敗を突破し、国際主義で武装した革命的人民の最先頭に立たねばならない。

小グル市民主義を本質とした全ゆる中間主義者達の空論的「国際主義」もまた朝鮮人民との連帯をかちとることは出来ない。我々は、金芝河氏の日本人民への鋭い糾弾と提言に応えきり、朝鮮植民地化を全面化させ日帝！朴体制の延命を見い出さんとする日「韓」闘僚会議を粉砕しなくてはならない。

日帝は、在日朝鮮人への暴力的弾圧によつて、日朝人民を分裂させ、侵略反革命戦争へ向けた〝城内平和〟建設を目論んでいる。我々は、七〇年代戦略的反攻戦の国際主義的発展と爆発を闘いとることを固く決意した：：我々は、社共・カクマル・人民戦線派の排外主義的頽落を突破し、国際主義で武装した革命的人民の最先頭に立たねばならない。

ロレタリアの団結と武装を打ち固め南朝鮮人民の決起に呼応して、七五春季闘争の大爆発をかちとることを宣言する」という集会宣言が読みあげられた。この集会宣言を最後に全員で確認し、蜂起・プロ独派が総力をもつて朝鮮連帯闘争を闘い抜く決意を打ち固めたのである。

◎朝鮮植民地化攻撃粉砕！
◎日帝！朴体制打倒、南北革命統一！
◎入管法・入管体制粉砕！
◎日「韓」闘僚会議粉砕！
◎外国人登録法改悪阻止！

全都女解研「週刊文春」糾弾闘争に決起

闘うすべての女性のみなさん、

四月十日、「週刊文春」糾弾の情宣を、全都女性解放研と立教大の女性解放闘争を担う女子学生を中心に克ちとつた。今回の情宣活動は、「週刊文春」への二度に亘る沖縄女性を先頭にした糾弾にひきなおり差別的無視をきめ込む編集局への追撃として永遠的に展開する闘いの第一波として勝ちとられた。

「文芸春秋」社の正門前でのビラ配布とセッタイをつけてのアジテーションにより、「文春」の差別記事の暴露と、沖縄海洋博攻撃の内実、そして沖縄の根底からの生活破壊の進行を、労働者、市民へ訴えた。「週刊文春」は、われわれの糾弾の決意をまのあたりにし、コソコソとビラを大量にもらいに来、守衛がウロウロするだけで、われわれの情宣活動の波及を恐れ、なすすべもなかつた。

まさにこの「週刊文春」三月十九日号の特集が、海洋博へ向けての「買春」の島としてのキャンペーンの先頭を切り、悪質なプレジャーの下僕として、沖縄への差別・同化攻撃、そして日本「本土」プロレタリアートとりわけ男性の腐敗頽廃、排外主義的動員の尖兵となつている許しがたい姿を糾弾しつつさせなければならない。

我々は、南朝鮮人民の不屈の英雄的決起に連帯して、七〇年代戦略的反攻戦の国際主義的発展と爆発を闘いとることを固く決意した：：我々は、社共・カクマル・人民戦線派の排外主義的頽落を突破し、国際主義で武装した革命的人民の最先頭に立たねばならない。

ロレタリアの団結と武装を打ち固め南朝鮮人民の決起に呼応して、七五春季闘争の大爆発をかちとることを宣言する」という集会宣言が読みあげられた。この集会宣言を最後に全員で確認し、蜂起・プロ独派が総力をもつて朝鮮連帯闘争を闘い抜く決意を打ち固めたのである。

◎朝鮮植民地化攻撃粉砕！
◎日帝！朴体制打倒、南北革命統一！
◎入管法・入管体制粉砕！
◎日「韓」闘僚会議粉砕！
◎外国人登録法改悪阻止！

全都女解研「週刊文春」糾弾闘争に決起

闘うすべての女性のみなさん、

四月十日、「週刊文春」糾弾の情宣を、全都女性解放研と立教大の女性解放闘争を担う女子学生を中心に克ちとつた。今回の情宣活動は、「週刊文春」への二度に亘る沖縄女性を先頭にした糾弾にひきなおり差別的無視をきめ込む編集局への追撃として永遠的に展開する闘いの第一波として勝ちとられた。

「文芸春秋」社の正門前でのビラ配布とセッタイをつけてのアジテーションにより、「文春」の差別記事の暴露と、沖縄海洋博攻撃の内実、そして沖縄の根底からの生活破壊の進行を、労働者、市民へ訴えた。「週刊文春」は、われわれの糾弾の決意をまのあたりにし、コソコソとビラを大量にもらいに来、守衛がウロウロするだけで、われわれの情宣活動の波及を恐れ、なすすべもなかつた。

まさにこの「週刊文春」三月十九日号の特集が、海洋博へ向けての「買春」の島としてのキャンペーンの先頭を切り、悪質なプレジャーの下僕として、沖縄への差別・同化攻撃、そして日本「本土」プロレタリアートとりわけ男性の腐敗頽廃、排外主義的動員の尖兵となつている許しがたい姿を糾弾しつつさせなければならない。

そして海洋博粉砕闘争の広汎な高揚の中で、われわれ女性解放闘争の任務の第一として、「週刊文春」糾弾、「買春」観光キャンペーンと対決しきらねばならない。

すべての女性のみなさん、ともに沖縄をゆるめず「週刊文春」糾弾への決起を訴えます。

☆「週刊文春」糾弾！
☆沖縄「買春」観光糾弾！

インドシナ民族解放戦争の前進に応え、日帝打倒の戦略的反攻へ

全ての日本労働者人民の皆さん！

ついに四月三〇日、カンボジア全土武力解放の全面勝利に続き、南ベトナムのサイゴン政権の完全降伏を文字通り武力解放として民族解放戦争の完全勝利が実現された。

このベトナム・インドシナ民族解放戦争の勝利と革命の永続的前進という歴史の流れを大きく革命する大事業のために、最も革命的戦闘精神に満ち打ちされて闘い抜いたベトナム・インドシナ人民の魂と血の犠牲に対して、われわれは今こそより増々徹底的な真の連帯の道とは何かを帝国主義国抑圧民族・プロレタリアートとして断乎として明らかにし、実践する義務がつきつけられているのだ。

インドシナ民族解放戦争の怒涛の進撃

全ての闘う労働者人民諸君！

まず最初に、一九七五年一月カンボジア人民の民族力進攻を一大決破口とするベトナム・インドシナ人民の民族解放勝利の総過程を、われわれは革命の偉大な前進として鮮明にかつ徹底的に自らの胸に刻みこまねばならない。

一九七五年一月に始まり、四月初頭プノンペン武力解放に至るカンボジア民族統一戦線の圧倒的な軍事・政治攻勢は、首都、主要都市、農村のカンボジア人民との徹底した革命的結合を基礎となす人民の武装蜂起と一体となった武力解放として、米帝を基軸とする世界の帝国主義の反革命介入の最後のあがきを打ち砕き達成された。一九七〇年三月、シアヌーク追放クーデター以降登場した、米帝のカイライ・ロン・ノル反共軍事独裁政権は、ロン・ノルの国外逃亡・様々な反革命策動をなさんとする残存政権を一切許さないカンボジア人民の民族解放―革命戦争という帝国主義の民族分割・抑圧支配に対する積年の苦しみを突破せんとする強大な力の前に完全に打ち砕かれた。

このカンボジア人民の勝利的前進と固く結合してのベトナム人民の武装進撃は、南ベトナム臨時革命政府、ベトナム民族解放戦線、北ベトナムの固い結合による軍事的・政治的攻勢として一斉に開始された。軍事的要衛パンメトートの武力奪取によって一挙に軍事的力関係の決定的優勢をガッチリ握った武装解放勢力は、人民の都市蜂起と結合しながらサイゴンの強力な包囲網勢をしいたのである。

チューは、「軍事上」の戦略的撤退が、そもそも反共軍事独裁政権の基礎として決定的な米帝の軍事的テコ入れという唯一の物質力による支えという前提の喪失の中でなされようとする時、最早、軍事的戦略撤退＝軍事的敗北＝反共軍事独裁政権の崩壊を意味することを、米帝への「泣きごと」として最後に思い知った。様々な「和平工作」＝政権のすげかえが、動揺する第三勢力を引き込んだとしても一切無力であることを決定的に明らかにした。すなわち、ベトナム・インドシナ人民に対する民族抑圧の元凶が帝国主義とその国際反革命・反共軍事独裁政権の人民抑圧のための権力基礎―権力機構の暴力的解体と革命政権の樹立以外いかなる中間的解決の道も有り得ないものとして断乎として遂行されたのである。

インドシナ民族解放勝利の歴史的意義

かかる闘いの勝利をかちとつたベトナム・インドシナ人民の歴史的・主体的な闘いは、帝国主義の民族圧迫・「分割」支配という耐え難い現実に対し、「民族解放―民族の統一」をめざし、共産主義勢力のヘゲモニーによる、労働者と圧倒的部分を占める農民の「労農階級同盟」を軸となす「土地革命」と結合された根本的な革命の力によつて支えられたものであつたのである。

われわれは、このベトナム・インドシナ人民の民族解放戦争勝利―革命の永続的前進の偉大な闘いが有する歴史的意義をはつきりと確認しなければならない。

その第一は、一九四九年中国革命に続く、戦後ヤルタ・ジュネーブ「協定」の下に構造化された戦後世界体制の崩壊を決定的なものとし、世界革命の前進としての歴史的な大事業としてあることである。

ベトナム・インドシナへの仏帝国主義の植民地支配が第二次大戦前・戦中・戦後として暴虐の限りを尽され、同時に、日本帝国主義の侵略・強盗戦争の二重・三重の民族抑圧を強いられる中で、様々な苦闘を強いられながらも、ベトナム・インドシナ人民は、日帝の侵略（戦争）を粉砕し仏帝に対しても一九四五年民族独立をかちとつた。だが、仏帝の米帝の七割以上の援助を背景とする再植民地支配が戦後強化されようとしたことについてディエンビエンフーの闘いをもつて粉砕しながらも、反革命の中軸としての米帝の直接的植民地支配―反共軍事独裁政権樹立、国際反革命同盟構築に支えられたヤルタ・ジュネーブ「分割」協定の戦後構造として一たん組みこまれることを余儀なくされた。この戦後の民族独立・中国革命を頂点とする革命の前進に対抗して反革命の陣営の下に組みこまんとした米帝とそれに屈服・補完したソ連を軸とする勢力の目論見を完全に無力ならしめ達成されたことは、革命の歴史的新段階としてはつきりとふまえなければならないのである。

第二には、トルーマン、アイゼンハワー、ケネディー、ジョンソン、ニクソン、フォードという米帝国主義の歴代大統領を通じて、まさに闘うベトナム・インドシナ三国人民の不屈の前進を前に、泥沼的介入と敗北を決定的なものとせざるを得なくなつた帝国主義の体制的危機が、未曾有の規模で促進されていることである。

「九六八年のテト攻勢を大きな転換点として、一九六九年ニクソン・ドクトリンの「アジア人をしてアジア人と闘わしめる」なる米帝による一層の民族抑圧の激化と敗退の開始は、「日米共同声明」による国際反革命同盟の再編、中・ソ「労働者国家」群への革命の前進を喰いとめんが為の分断攻撃をも激化させ、米帝と他帝国主義列強の政治・経済的矛盾対立の深まりを決定的に累積させていつたのである。

一九七二年ベトナム・インドシナ人民の国境を越えた武装民族解放闘争が、明確に、米帝を先頭とする国際反革命との全面対決として発展し、増々ベトナム・インドシナとりわけベトナム・カンボジア・ラオス三国人民のそれぞれの民族の共通の利害として米帝国主義を先頭とする反共軍事独裁政権と闘い抜き民族解放を達成することをかけた実践的結合を強化させた。

確かに、ソ連共産党の反革命的裏切集団は言うに及ばず、中国共産党の国内経済建設―国社会主義建設路線の根本的限界に規定された実践的ジグザグによる米帝国主義の反革命的分断策動の容認のため一時的な戦術的妥協を一九七三年「ベトナム和平協定」「ラオス和平協定」として余儀なくされながらも、「米帝軍の全面撤退」を最大の戦略的前進に有利な条件として勝利的にかちとり、同時に、カンボジアの永続的武装進撃という条件の下に政治軍事的・戦略的総攻勢の雄勢がガッチリと固められ勝利に結びつけられたのである。

そもそもこの「和平」協定を通じた反革命の側の巻き返しの策動は、「協定」の諸規定を空文句化し、米帝―反共軍事独裁政権、国際反革命同盟の再編強化、訪中―訪ソによる中・ソ対立を利用した革命の前進への歯止め、分断策動と、ありとあゆる手段を用いてなされようとしながらも、「石油危機」「中近東の危機」という最大の政治・軍事・経済的矛盾を孕む中で、「ニクソン・ドクトリン」・アジア極東戦略上の大きな破綻―世界戦略（「緊張緩和」政策に裏づけられた政治・軍事的な反革命の側の巻き返し）の破綻を白日の下に露呈させられたのである。

それは、米帝は国際反革命の頭目・番兵としての位置はもとより、その「威信」すら保持できず、再介入、反共軍事政権の防衛の軍事的・政治的・経済的能力を失い、同時に、中国への規定力は言うに及ばず、ソ連に至つては自己の政治的に有利な条件としてベトナム・インドシナ民族解放―革命戦争を利用せんとする、その意味では許し難い魂胆であるわけだが、かかる諸関係のうちに、「デタント」政策の利益の有無をめぐつての不満を米帝自身内部に発生させてしまつているのである。

かかる情勢が、ヤルタ・ジュネーブ「分割」協定という戦後世界体制の政治・軍事構造の中で大きな比重をもつて存在する「南北問題」―朝鮮に革命の側においては決定的に有利な条件として、反革命の側には危機の飛躍的増大の問題として集中するのは必然の問題であるのだ。

第三には、戦後世界体制の崩壊を画したベトナム・インドシナ人民の武装民族解放―革命の永続的前進が、文字通り、現代過渡期世界の革命と反革命の攻防の力関係を大きく革命の側に有利にしていく中で、帝国主義の矛盾の激化を国際反革命同盟の絶望的手直しと侵略反革命―植民地化攻撃の集中的激化、帝国主義国権力再編の絶望的・強権的遂行として、革命の客体的諸条件を不可避に、かつ鮮明で浮びあがらざるをえないことである。すなわち、革命主体にとつては、真先に帝国主義国抑圧民族・プロレタリア人民に対して、自らの階級的責務・歴史的任務を真の国際主義の立場と実践的方向性を帝国主義国、植民地従属国、「労働者国家」の三ブロック階級闘争の結合の環が、国際反革命同盟―安保粉砕、帝国主義の侵略反革命（戦争）粉砕、自国帝国主義打倒として貫徹されねばならぬことをつきつけていることである。

米帝―日帝は、国際反革命同盟再編の問題において、一九六九年日米共同声明の「韓」国条項を頂点に、日帝の侵略反革命（戦争）遂行と一体の軍事的遂行能力を問題とし、核の持ち込み等、「事前協議制」の公然たる空洞化を宣言し、米・日・「韓」反革命臨戦体制の強化、日帝―朴体制の絶望的打ち固めを計らんとし、日帝の国内権力再編のボナパ反革命攻撃「上からの内乱」の一挙的激化としてなしてきていることである。朴反共軍事独裁政権の下での「戦時体制」への突入宣言と軍事的緊張状態の反革命的加速を遂行している。

勝利したベトナム・インドシナ人民の革命の永続的前進は、増々、反革命分子の一切の介入を粉砕し、世界革命の窮極的勝利に向けて革命を前進させるために政治・軍事・経済的基礎を徹底してうち固める闘いへ如何なる困難の下にあろうとも断乎として飛躍しつつ克ち取られるであろう。

まさにコミンテルン変質解体以降のソ連共産党を先頭とするスターリン主義の世界革命の勝利に向けた闘いへの反革命的裏切や本質的にはスターリン主義としてありながらも、実践的・政治的なジグザグを繰り返す中国共産党をはじめとする歴史的な国際共産主義運動の歪曲に抗し、今はど決定的な飛躍が問われている時期はない。

第四に、ふまえねばならない意義は、世界のプロレタリア被抑圧民族人民にとつて解放の大きな確信を絶対的なものとして刻み込んだことである。

世界の帝国主義の中で「最強」と言われたその内実をその反人民的本質をとことん全世界のプロレタリア被抑圧民族人民に暴露し、徹底して粉砕・打倒する人民の力を具体的歴史的事実として刻印し、戦闘精神をこのうえなくふるい起たせ、全ゆる闘いの歪曲を許さず、三〇年以上に亘る激闘のうちに勝利をもぎとつたその革命的英雄主義・革命的自己犠牲の精神を真に我がものとすることを要求していることである。

日本帝国主義抑圧民族・プロレタリア人民が、自国の侵略反革命帝国主義の暴虐の限りを尽すことを、闘うアジア人民、全世界の被圧迫民族人民に許してきているとの事実と、それまでのアジア侵略の血ぬられた歴史の重みを徹底して踏まえるならば、血債にかけた帝国主義打倒の戦略的総反攻に向けて決起しなければならない。闘うアジア人民との決定的立場の相異をふまえた上での同質の革命的戦闘精神、国際主義の精神で徹底して武装しきり、わが帝国主義国プロレタリア人民こそがそのような革命的自己犠牲の精神をいかんなく発揮すること、このことを絶対的義務として確認しなければならないのである。

真の国際主義で武装し総反攻へ決起せよ

すべての革命的プロレタリア人民諸君！

われわれに問われる第一の任務とは、闘うアジア人民との国際主義的連帯を真に克ちとるために、われわれは、日本帝国主義の血ぬられた侵略の歴史と今日の侵略反革命の本格的遂行という事態の中でのわが日本プロレタリア人民の抑圧民族としての腐敗・堕落を絶対に血債する思想的・実践的立場を徹底して打ち固めねばならない。

闘うアジア人民、とりわけ、今日までの朝鮮人民を先頭とした日帝による植民地支配は増々日帝―朴体制として強化され、日本民族＝抑圧民族の腐敗と堕落は、増々深まり、同時に、日帝・米帝・「韓」国を軸とする反革命の共同の前線基地としての神縄に対する全面的な差別・同化・軍事支配の強化、すなわち日帝による沖縄の反革命的統合の総仕上げを目論む段階にあつて、決定的な抑圧民族として天皇制・天皇制イデオロギー攻撃を頂点として登場せんとしている。われわれは、闘うベトナム・インドシナ人民に対して、あらん限りの反革命的「援助」をなしてきた日帝が、「民族自決」をベテンの言葉にすることを絶対に許してはならず、そのためにも強固にわが血債の思想的・実践的立場で武装し闘い抜かねばならない。

第二の任務は、革命の基本戦略―戦略的総路線で徹底した武装をなしとげることである。

「闘うアジア人民と連帯し、日帝の侵略反革命を攻撃的国内階級激突戦へ転化せよ！」「沖縄解放―安保粉砕―日帝打倒・米帝放逐！」「朝鮮植民地化攻撃阻止―日帝・朴体制打倒―南北革命統一」の下に戦略的反攻を戦い取らねばならない。

今日、沖縄の反革命的統合の総仕上げをかけて七・二〇海洋博開催の攻撃・天皇（皇族）の海洋博臨席をテコとした、天皇制―天皇制イデオロギー攻撃を激化させ、戦犯天皇をはじめとする戦争責任の隠蔽・清算の上に皇民化攻撃を強め、沖縄人民の差別を深めんとしている。沖縄の反革命的統合の総仕上げを急がんとする意図が、他ならぬ朝鮮侵略反革命・釣魚台略奪をはじめとする闘うアジア人民への反革命的敵対・他民族抑圧の決定的総動員体制づくりそのものの先頭に再度沖縄人民を立たせんとするものである。

そのことは米・日・「韓」反革命臨戦体制を強化し日帝―朴体制を日「韓」閣僚会議開催で徹底して反革命的に強化し、朝鮮の「南北分断固定化」をなしとげんとする、決定的な軍事的な保障を与えんとするものであり、日帝の入管法―入管体制（外国人登録法改悪）と一体化した所じて許してはならない攻撃である。

これらの攻撃との闘いを文字通り、日帝の「上からの内乱」ボナパ反革命攻撃との総対決として、「革命的内乱」―蜂起・「内戦」の権力闘争を切り拓く方向性の下で闘い抜かねばならないのである。

これこそ「国際主義と武装」の問題に実践的にいかに応えるかの実践的方向性であり、われわれは、この基本戦略―戦略的総路線の絶対的正しさによつて骨の髄まで武装しきらねばならないのである。

第三の任務は、七五年階級闘争の決定的な全人民的政治課題として、沖縄海洋博粉砕！戦犯天皇（皇族）訪沖撃砕を絶対に勝利し抜くこと。同時に朝鮮人民の決起に連帯し、日「韓」閣僚会議粉砕・入管法―入管体制（外国人登録法改悪）粉砕を軸とする闘いに勝利し抜かねばならない。

第四の任務は、日本プロレタリア人民の腐敗・堕落せる部分として社共・カクマル社会排外主義潮流との仮借なき断乎とした闘いを実現しなければならない。

沖縄闘争総括論者、四トロ・マル青や、最近まで沖縄について語らなかつたが自己保身のためにのみ沖縄闘争への差別的介入をなさんとする日向一派を断じて許さず、あらゆる中間的動揺分子との徹底した分裂を押し進めて闘い抜かなければならない。

まさに闘うアジア人民との真の連帯の内実を「国際主義と武装」の実践的貫徹をもつて七五年階級闘争の戦略的反攻を戦取しなければならないのである。

敵戦車奪取／女民兵隊により革命政府旗立つ

狭山闘争の永続的発展に向け全狭連に結集せよ

全狭連（準）

全国の闘う同志諸君、友人諸君！

十・三一「無期懲役」判決＝差別死刑攻撃を頂点とした日帝の差別攻撃を前に、今こそ全人民が狭山闘争を基軸として、部落解放闘争の一大攻勢をもつて反撃に転じなければならないとの時期に、狭山闘争に結集した多くの部分が日帝の差別攻撃に屈服し、清算主義・敗北主義・融和主義を全面化させ脱落・逃亡を開始している。我々の任務は鮮明である！　無実の部落青年石川氏を実力で奪還することであり、狭山闘争の歴史的意義を防衛し全ゆる清算主義・敗北主義・融和主義を粉砕し永続的武装的発展を克ち取ることである。我々はかかる闘いを三・三〇東拘実力糾弾闘争として闘い抜き、この闘いの成果をもつて狭山闘争の恒常的共闘機関として全狭連（準）を結成し、狭山闘争の永続的武装的発展に向け進撃を開始した。

無実の部落青年石川一雄氏が、「自白」を否定し無実をはつきりと主張することによつて開始された狭山差別裁判糾弾闘争は、今、その一大試練を迎えた。

即ち、狭山闘争の巨大な歴史的意義を防衛し、発展させ日帝打倒！部落解放の一大水路を切り拓くのか、それとも狭山闘争の意義を清算し、日帝の差別・分断攻撃に屈服し、社会排外主義へ転落していくのか、狭山闘争に結集した部分が、この二つの潮流にはつきりと分岐を開始した。

狭山闘争の発展、とりわけ再開公判以降の闘いは、日帝・寺尾を追いつめ互格の闘いを展開し労働者人民に革命的な闘いの方向性を指し示し、そしてこの闘いは、差別の元凶たる日帝を打倒する部落解放闘争の方向性を明らかにした。

又、革命的左翼と労働者人民に自らの帝国主義的頽落・腐敗・差別主義・排外主義への歴史的屈服に対する自己批判の問題が突きつけられ、そのことを通して被差別大衆と労働者人民の団結の形成に向けた第一歩を狭山共同闘争として打ち固めていつたのである。

日帝・寺尾による十・三一「無期懲役」判決＝差別死刑攻撃は、この狭山闘争の巨大な発展に対する恐怖の表現に他ならないのである。そして「石川氏の無実の主張は命がおしいからだ」「自白と客観的事実の矛盾は問題ではない」という一審を上回る差別性に貫かれており、又、「死刑」から「無期」という形態をもつて反革命差別者集団、日共の「情状的量論」を逆手にとり敵対を促進させ狭山勢力の分断を目論んでいるのである。

ベトナム・インドシナを始めとした民族解放―革命戦争の歴史的前進は植民地支配体制の崩壊的危機を生みだし、帝国主義間対立を激化させ戦後帝国主義支配体制は絶望的危機にさらされ、日帝はその唯一の延命の道をアジア侵略反革命の本格的遂行としてなさざるを得ず、侵略反革命体制の打ち固めを全ゆる差別主義、排外主義の動員をもつてなさんとしており、部落差別・人民分断攻撃に対決して飛躍的に成長する狭山勢力に恐怖した日帝は自己の体制的延命をかけた「絶望的挑戦」として十・三一差別死刑攻撃をしかけてきたのである。

そして、狭山闘争の対極において発生した反革命的差別者集団との闘いを強化していかねばならない。日帝は差別分断攻撃の尖兵としてこの反革命差別者集団、日共、カクマルを動員し、狭山闘争、部落解放闘争の圧殺を図つている。これとの闘いを抜きに狭山闘争の永続的発展はありえないのである。

我々はかかる闘いを東拘実力糾弾闘争を基軸として闘い抜くべく三・三〇実行委を形成し三・三〇東拘実力糾弾闘争を打ち抜き、真にこの闘いを発展させ、飛躍させるべく、日帝―当局の再建合理化攻撃に対し、日帝―当局の弾圧をはねのけ東交本部民同、日共、カクマルの敵対を許さず、この第二次再建合理化が孕む、部落差別強化、「障害者」差別―排除攻撃を暴露し、これとの対決を東交反合決戦として東交九・三〇処分撤回共闘を始め、職場において帝国主義労働運動と対決し、日帝打倒へ進撃する革命的労働運動を創出すべく闘い抜いている労働者が結集し、九州を始め全国の労働者、学生、高校生の結集をもつて「全狭連」を結成する。

東拘の獄中において日帝・寺尾に対する階級的憎悪に燃え、不屈の闘いを貫いている石川一雄氏に口先だけの言葉でなく自らの肉体をもつて連帯しきり、石川氏を実力で奪還する闘いとして東拘実力糾弾闘争を闘い抜き、狭山闘争の永続的武装的発展を克ち取つていかねばならない。我々は、一切の反革命差別者集団を粉砕し、清算主義・敗北主義・融和主義を粉砕し、狭山闘争の永続的武装的発展を克ち取り、無実の部落青年石川一雄氏を奪還するまで断乎として闘い抜く事を宣言する。

全ての労働者人民は全狭連の旗の下、部落解放―日帝打倒へ進撃せよ！

狭山差別裁判糾弾・無実の部落青年石川一雄氏実力奪還全国連絡会議（準）

東拘実力糾弾闘争

五月十八日（日）

東京都交通局―日本帝国主義の「再編」という形態をもつて反革命差別者集団、日共の「情状的量論」を逆手にとり敵対を促進させ狭山勢力の分断を目論んでいるのである。

ベトナム・インドシナを始めとした民族解放―革命戦争の歴史的前進は植民地支配体制の崩壊的危機を生みだし、帝国主義間対立を激化させ戦後帝国主義支配体制は絶望的危機にさらされ、日帝はその唯一の延命の道をアジア侵略反革命の本格的遂行としてなさざるを得ず、侵略反革命体制の打ち固めを全ゆる差別主義、排外主義の動員をもつてなさんとしており、部落差別・人民分断攻撃に対決して飛躍的に成長する狭山勢力に恐怖した日帝は自己の体制的延命をかけた「絶望的挑戦」として十・三一差別死刑攻撃をしかけてきたのである。

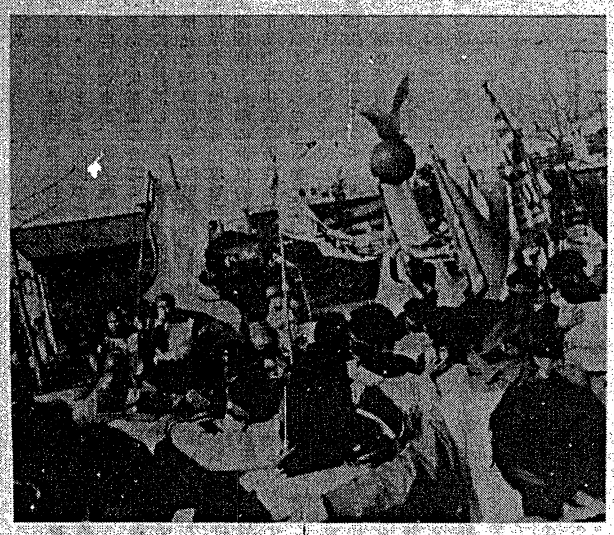
5・18全狭連結成集会に結集せよ

十・三一「無期懲役」判決＝差別死刑攻撃は我々に、自らの闘いの不充分性を暴露し、又、石川一雄氏は我々に狭山闘争の勝利に向け新たな永続的闘いに決起することを求めている。

我々は何よりも、いまだ石川氏が東拘の奥深く幽閉されていることを自らの闘いの不充分性として自己批判し、十・三一差別判決に示される日帝の絶望的攻撃を粉砕し、無実の部落青年石川一雄氏を実力で奪還しなければならない。

そして同時にこの闘いは、日共の「控訴趣意書」に基く公正裁判要求路線との闘いの不充分性が寺尾美化論、楽観論を許してしまつたことを踏まえるならば、清算主義・敗北主義・融和主義との闘いは絶対に不可避のものであり、そのためには「狭山差別裁判糾弾」「無実の部落青年石川氏奪還」の原則をより鮮明にし、「部落解放―日帝打倒」「部落差別糾弾―生活権奪還」の戦略的方向性の下に、部落解放同盟との日常的支持・連帯を強化し、狭山闘争の永続的武装的発展を克ち取らねばならない。

もはや狭山闘争は武装的発展なくしてその発展はない段階へ突入しているのである。



狭山闘争の永続化を切り開いた3・30東拘闘争

革命派―戦闘的労働者は現闘会議、九・三〇共闘に総結集せよ!!

全国の闘う労働者、学生諸君！

闘う被差別大衆のみなさん！

東京都交通局―日本帝国主義の第二次再建合理化攻撃に、断乎として対決を挑み、実力闘争に決起した東交労働者の闘いはいよいよ当局―日帝との総力を賭けた決定的局面に突入した。

ベトナム・カンボジアを先頭とするインドシナ武装民族解放闘争の決定的勝利によつて追い詰められ、いよいよ絶望的危機に直面した帝国主義列強は、今や、根底的崩壊の到来を現実のものとし、神縄「返還」を決定的環とした国際反革命同盟の再編―世界再分割戦に一切の延命を賭ける日本帝国主義の侵略反革命戦争体制構築の攻撃は、今や、国内外を問わず、被差別抑圧民族、被差別大衆、労働者人民へ耐え難いまでの犠牲を強要している。朝鮮植民地化―入管法・入管体制の強化によるアジア侵略反革命戦争の遂行を、沖縄の反革命的統合への大和―沖縄人民の排外主義的動員によつてなし切らんとする日帝は、部落民、「障害者」、女性、朝鮮人民、沖縄人への徹底した差別分断攻撃を激化させ、一方、労働者階級総体を、社会排外主義へと屈服させる事によつて強力な侵略反革命戦争体制の完遂を野望しているのだ。

かかる日帝の攻撃は、同盟・エセの反共襲撃としての育成にとどまらず、社共―総評・民同社会排外主義の反革命的屈服をとりつける事によつて、労働運動総体の「城内平和」への封じ込めとして実現されんとしている。

東交反合決戦は、当局―日帝との対決にとどまらず、まさに、七四・七五春闘における「国民春闘」「障害者」「医療被害者」、家族、本医学会総会科弾！」のシュプレヒコールが、会館を揺るがした。

ペテンの「閉会宣言」をなし逃げを支持・支援して闘う労働者、学生、市民の圧倒的追求・糾弾により、ついて粉砕されつくした。

四月五日「開会式」会場の京都国際会館前に結集した、全国の「障害者」「医療被害者」家族、労働者、学生、市民の闘いは、「総評」会場で予定されていた犯罪的「講演」が「障害者」「医療被害者」家族を先頭とした闘いによつて全て粉砕された。

会場内においては、平沢会頭の「異議なし！」の一ぴつと共に沸騰を占拠し、「総評」四・五―六は、全国の「障害者」「医療被害者」家族、労働者、学生、市民の千二百名を上回る結集されていつた。

京都における「第十九回日本医学会総会」四・五―七は、全国のエセドクター・機動隊による弾圧をはねのけて、内外一体となつての「日本医学会総会」は、四つの分科会を含み集会・交流の場として「障害者」「医療被害者」家族の闘い、そして各支持・支援組織よりの闘いの報告、アピール、討論が活発に行なわれた。

更には今後の闘いに向けた連帯の深化が確認される中で、集会参加者全員による京都市内デモが敢行され、会場前より、「障害者」「医療被害者」家族を先頭とした労働者、学生、市民の隊列によつて圧倒的デモが展開された。デモコースの道筋に当たる「第十九回日本医学会総会」を糾弾しつつ、京都府警の妨害をはねのけて、終始シュプレヒコールをもつて貫徹されていつた。

「日本医学会総会」を徹底糾弾!!
第二回反医学会総会かちとる

「機械化絶対反対」の東交七四大会路線を、当局―日帝の攻撃の前に恥も外聞もなく捨てさつた東交民同の反革命的逃亡を許す事なく、「第二次再建合理化粉砕―OTO導入実力阻止」を掲げ、導入予定地・高島平に現闘を堅持した東交九・三〇処分撤回共闘を先頭とする戦闘的東交労働者は「四・九第二次再建合理化粉砕・OTO導入実力阻止・東交反合決戦勝利」

九・三〇共闘と現闘に結集する職闘的労働者の団結を鮮明にしていつたのである。

四・九集会はかかる九・三〇共闘の革命的地平を更に打ち固めるものとして、部落大衆、「海洋博」粉砕沖縄―「本土」実行委沖縄現闘、「障害者」の足を奪い返す会、入管法攻撃の前に数度の収容を強制されながら、日帝の入管体制と闘い続けているSさんを始めとする闘う被差別大衆、全金本山支部、都職、東水、地域の闘う労働者、学生を結集して成功裡に闘い抜かれていつたのだ。

東交反合決戦に総結集せよ!!

全国の闘う労働者、学生諸君！

闘う被差別大衆のみなさん！

東交反合決戦は、文字通り、当局―日帝と民同排外主義潮流一体となつた、労働運動の「城内平和」を粉砕し、東交反合決戦勝利を克ち取る決意である事を明らかにしてきたいと思います。

☆第二次再建合理化粉砕！

☆六号線三駅延長合理化粉砕！

☆OTO導入実力阻止！

☆荒川線ワンマン化粉砕！

☆バス路線縮少再編粉砕！

☆当局の「障害者」差別乗車拒否糾弾！

☆墨田バス路線打ち切り攻撃粉砕！

☆差別交通行政糾弾！

☆一切の社会排外主義・経済主義を粉砕し、東交反合決戦に勝利せよ！

☆OTO行合工事粉砕・現闘実力奪還

☆東交青年婦人労働者の闘いに対して、当局は四月十五日、三五〇名の職制と、一五〇名の機動隊、三台の装甲車という威嚇の下、現闘本部を撤去させるという強権的攻撃に出てきました。

いよいよ、当局―日帝との実力対決が要求される現局面を、九・三〇共闘―現闘委による実力闘争体制の構築を実現し、共に一大反撃に決起されん事を全ての闘う同志のみなさんに強く訴え、九・三〇共闘―現闘委を先頭に東交労働者は断乎として、OTO導入実力阻止―東交反合決戦勝利を克ち取る決意である事を明らかにしてきたいと思います。

朝鮮人民との連帯をめざし人民革命の飛躍を克ち取れ！

闘争の

インドシナ人民の闘いは、プノンペンカイライ政権の無条件降伏を克ち取り、反革命最後の砦としてあるサイゴンを包囲し、怒濤の進撃を続けている。インドシナを先頭とする民族解放闘争の嵐はアジア全域を把え尽し、朝鮮に於いて、七三年十月決起をもつて開始された反日（帝）朴打倒闘争は、朴の相次ぐ反革命弾圧をはねのけ不屈の抵抗精神をもつて朴の野望を次々と破産に追い込めてきた。朝鮮人民の闘いは増増広範な基盤を獲得しつつある。二月「国民投票」を巡る闘いは朴の危機を白日の下にさらした。

インドシナに象徴される民族解放闘争の勝利は、帝国主義の千年王国の夢を打ち砕き、現代過渡期世界がプロレタリア被抑圧人民の未来へと大きく転換を遂げつつあることをはつきりと示している。

今や国際反革命同盟を基礎に、他民族抑圧と侵略反革命戦争政策によつて延命を遂げてきた帝国主義は、全世界の労働者人民の攻勢的前進の前に絶望的危機を深めている。帝国主義世界体制の危機が帝国主義の内的矛盾の発現のうちにではなく侵略反革命戦争の展開を逆手にとつたプロレタリア被抑圧人民の闘いを通して形成されているという事実を死滅しつつある帝国主義の今日の姿の中にはつきりと見ておかねばならない。七〇年代を画した米帝の反革命巻き返し戦略は中国・ソ連との新たな「平和共存」として実現されるかに見えたが、四年を待たずして再びその再編を余儀なくされている。その再編が日米反革命同盟の強化を中軸としつつ新たな反動と更なる侵略反革命のうちに実現される事は火を見るより明らかである。植民地従属国人民の闘いの孤立を強いてはならない。徹底した自国帝国主義打倒の立場に立ち民族解放闘争との国際主義的連帯・階級闘争の合流を克ち取る事抜きには日本階級闘争を一歩も前進させる事はできないのである。

第一章　朝鮮情勢の急展開と我々の闘い

帝国主義足下に於いて革命の問題に応え、七〇年代を戦略的反攻戦の勝利をもつて権力闘争の時代へと導びかんとする時、民族植民地問題をけづつして避けて通る事はできない。それどころか、帝国主義的抑圧民族としての存在そのものに規定され、我々の生活から感覚までをも把え込んでいる排外主義との対決、実践的決別を抜きに、けづつして帝国主義打倒への接近は不可能なのである。帝国主義国内に膨大に存在する社会排外主義者の群は、戦後階級闘争の歴史が示すごとく帝国主義の差別排外主義攻撃の前に永遠の無力を晒してきた。

「帝国主義戦争を内乱へ」として提起されたレーニンの戦略的核心は、第二インターとの決別、激烈な闘いを不可避とした。

「他民族を抑圧する民族は自由ではありえない」とマルクスが提起し、レーニンによつて帝国主義国内プロレタリアの主体的立場の反省を踏えて、プロレタリア国際主義の核心として提起され、実践された「自決権承認」の闘い、このすぐれて革命的な核心としてある民族植民地問題の復権を現代過渡期世界に於いて実践的に獲得することとそ問われているのである。「闘うアジア人民と連帯し、日帝のアジア侵略反革命を攻撃的国内階級激突戦へ転化せよ！」という蜂起―プロ独派の路線のうちに民族植民地問題の実践的深化を克ち取り、被抑圧人民との連帯を徹底して問題にしてこそ日本革命の未来を我がものとできるのである。

朝鮮人民の永続的な抵抗、チュー、ロン・ノルの相次ぐ崩壊を前に増々抜け道をなくした朴カイライは、民青学連事件被告十二名の再拘束、デッチ上げ「人民革命党事件」被告八名の虐殺、緊急措置七号の発動や「国家冒瀆罪」の新設等、更なる反動の道を歩いた。

米日帝は、宮沢・キッシンジャー会談に於いて「『韓』国の安全は日本の安全にとつて緊要である」とする「韓」国条項の再確認を密約し、沖縄を朝鮮危機に対する最大の後方基地として強化する事を緊急の課題とした。

この二つの事態は明らかに、インドシナにもたらされた民族解放闘争の勝利に危機を深めた米・日・朴がアジアに於ける最大の反共防波堤戦略拠点として日帝・朴体制の飛躍的強化を目論んでいる事を示している。

その中軸に六月日「韓」閣僚会議の開催が位置している事をはつきり見据えねばならない。日本帝国主義は、朝鮮植民地化攻撃をアジア侵略反革命の橋頭堡に据え、七〇年代的延命の突破口を開かんとしている。

日帝の朝鮮植民地化攻撃は直に及ぶ朝鮮人民への抑圧の歴史をもつて、この歴史の上に今また植民地的収奪、民族抑圧の新たな質を展開してきている。それはけつして帝国主義権力と植民地との関係として客観化できる様なものでなく、日帝の歴史は百年に及ぶ朝鮮侵略・侵略反革命の歴史であり、その中で形成された日本プロレタリア人民の朝鮮人に対する差別排外思想に支えられてこの過程が実現されてきた事を忘れてはならない。

この事に無自覚ならば、日帝の朝鮮植民地化攻撃をスソポリ欠落させ、小ブル平和主義的に日米安保の破棄を叫び、金大中事件に際しては日帝に「国家主権」をふりかざす事を要求していつた社共、カクマル社会排外主義者の域を一歩も越え出ることはできない。

戦後民主主義に目を奪われ、戦前の植民地支配の責任を清算し、朴の反動をのみ批判するという帝国主義的思い上りこそ日本プロレタリア人民の最も悪質な驕敗なのである。

この様に問題を設定する時、我々もけつしてかかる観念から完全に自由であつたとは言えない。それどころか、我々の生活から感覚までむしばんできた帝国主義の病にむしろ無自覚でさえあつた。それは階級的実践の中で七・七華青闘告発という形で被抑圧人民の糾弾にふれる迄、革命的左翼といえどもそれを放置して過してきた。

今日、国際階級闘争の世界革命への転化を主体的に切り開く環として、日帝の植民地化攻撃粉砕！日帝―朴体制打倒！南北統一支持の闘いを問題にする場合、我々は朝鮮人民の闘いへの階級的団結の内実、実体的連帯を問題にしなければならず、実践的には在日朝鮮人民との連帯をその第一歩に据える事抜きには空語と化してしまう事を忘れてはならない。

六五年日「韓」闘争から七〇年安保へ登りつめる過程は、日帝の復活からアジアに向けた「侵略・反革命」そしてそれがもたらす国内「抑圧」の激化としてこの過程を把え、日帝打倒―侵略・反革命・抑圧との闘いを武装闘争の大きなうねりとして形成した。それが社共の一国主義、小ブル平和主義、議会主義との大きな分岐を形成しつつ、国際階級闘争の結合が目指されながらも、そこには在日朝鮮人民の存在の一切が忘却され、「日『韓』条約」「日『韓』法的地位協定」から「入管法」へと大きく闘われた在日朝鮮人民の闘いを一切踏みようとしなかつたのである。

戦旗派建設から社会排外主義者日向一派との闘いへ至る過程は「共同反革命論」の超帝国主義論的展開のうちに民族植民地問題への反省の契機をスソポリ欠落させ、華青闘告発として問われた糾弾の内容を主体的に反省してゆく契機を解体するという大きな誤りを犯してきたのである。

「我々にとつて日本人が変革の対象として存在するであろうか。我々が告発を繰り返し

行なつても、空虚な感じばかりが残る」という在日朝鮮人民の叫び、「日本人に見えない日常的入管行政の重圧」等として度々なされた華青闘をはじめとする在日朝鮮人民の告発・糾弾、そして民族抑圧に対する怨念と呻吟を受けとめ、徹底した自己批判をバネとして出発する事抜きには七〇年代階級闘争の核心を我がものとする事はできない。

日「韓」条約を突破口とする日帝の植民地化攻撃が「困つている隣の国『韓』国を救う」という帝国主義的論理によつて貫かれ、「援助」という名目の侵略の弾丸を植民地的収奪の上にどれだけ多くの朝鮮人民の血を吸つてきたのか、その事の一切が「帝国主義的人道」のうちに隠蔽され、「民族的蔑視」意識＝排外思想をもつて朝鮮人民に対する暴虐を極めているのである。

この排外思想は朝鮮植民地化攻撃として在日朝鮮人民の在日という実存の上に、帝国主義的民族抑圧をバネとしつつ日々拡大・再生産され続けている。

それ故、日「韓」条約と一体化してかけられた「日『韓』法的地位協定」攻撃・七〇年代侵略反革命（戦争）体制準備の要に位置付けられている入管法・入管体制攻撃は日帝の植民地化攻撃＝侵略反革命の展開に向けた階級支配の不可欠の基礎として民族分断・反共民族排外主義の形成を目指したのである。

それは同時に在日という実存故に、自らの解放を叫ばんとする時、最も鋭く日帝と対決せざるを得ないという朝鮮人民の非和解的存在への帝国主義的恐怖を支配者特有の嗅覚をもつて差別・分断・抑圧・同化・追放・治安弾圧的予防反革命の体系を展開してきているのである。

日帝―朴体制の下で「国籍」選択の自由を剥奪され、「同化か追放か」の二者択一を迫られ、差別と抑圧のくびきの中で、一切の政治的・民族的権利を奪われ、生活の貧困を余儀なくされながらも、それを跳躍台として決起し続ける在日朝鮮人民の歴史と生命にどれだけの自覚を有してきたのか？「十月維新」体制の下で自らの決死性を代償として民族の解放を叫ぶ朝鮮人民の決起をどれだけの重みをもつて把えようとしてきたのか？その事の一切を帝国主義抑圧民族の歴史的負債として受けとめ、切開してゆかねばならない。

六月日「韓」閣僚会議を許す事は明らかに更なる朝鮮人民への抑圧の意を強いる事である。日帝はこの過程に合せつつ、「外国人登録法」を「入管法」攻撃のなしくずし的実現としてその改悪を目論んでいる。我々は日「韓」閣僚会議粉砕の闘いの中で「外登法改悪」阻止を明確に位置付け、巨大な進撃を実現しなければならない。

これらの攻撃の一切が戦後入管行政の蓄積とその集約として実現されんとしている事を見る時、戦後入管行政の歴史的展開を見る中から今日の入管法・入管体制攻撃の性格を切開してゆかねばならない。

第二章　戦後在日朝鮮人民抑圧と日本階級闘争

四五年、帝国主義間戦争に於ける日帝の敗北と同時に在日中朝人民は強制連行による虐待と飢餓からの解放を目指して直ちに闘いに決起した。徹底した排外思想をもつて帝国主義戦争を貫行した日本プロレタリア人民の無気力に比し、在日中朝人民は生々と戦後階級闘争の扉を開いたのである。「監獄部屋」からの解放を目指した中国・朝鮮人労働者は夕張や足尾に於けるストライキ闘争への決起として爆発し、全国の鉱山ストライキ、政治犯釈放要求の闘いへと波及した。

この最初の反撃は、支配者階級の意図する様な日本人労働者との民族的対立へと発展するどころか逆に四七年二・一ストへと登りつめる戦後革命運動の烽火となつたのである。

占領軍政下の在日朝鮮人民支配

朝鮮人虐殺の危険を予測した在日朝鮮人民は、一九四五年十月、在日朝鮮人学生連盟、在日朝鮮人連盟（朝連）を結成し、その一部は獄中被告を迎えて再建された日本共産党に加盟していつた。一九五一年「団体等規制令（団規令）」による朝連解散、一九五一年「在日朝鮮人統一民主戦線（民戦）」結成、そして在日朝鮮人総連合会（総連）結成に至る十年間は、差別や迫害、弾圧の歴史とともに、戦前から受けつがれた朝鮮人民のもつとも献身的かつ戦闘的な抵抗と闘いが、激烈に権力に肉迫し

抑圧と差別支配に抗する闘いの問題であつた。

鉱山ストライキの決起に始る在日朝鮮人民の闘いは、人民委員会の組織を基礎に朝鮮半島を席捲する解放闘争に呼応し、明らかに民族的性格を帯びて、日本帝国主義・占領軍支配に鋭く迫つたのである。

それは四八年文部省通達に基づく日本語教育の強要・朝鮮人学校閉鎖の攻撃をめぐつて全国に闘いの大衆的爆発が実現されたことのうちにその端的な姿を見ることができる。とりわけ、大阪八千名、神戸一千名を結集して闘われたこの闘いは、警官隊の阻止線を突破し、庁舎の実力占拠へと発展した。これに対し、帝国主義者は戒厳令にも等しい弾圧体制をもつて、占領軍の直接出動の下騒乱罪を適用し、総数二九七三名の逮捕をもつて屈服を迫つたのである。

これは、中国・朝鮮に於ける革命の前進という事態を背景に米帝のアジア戦略、それに基礎付けられた占領政策の転換が明確に自覚化される過程と呼応し、朝鮮戦争を射星に入れた戦争遂行の最大の後方基地としての日帝の階級支配の確立を目指すものとしてあつた。

米帝及び日本政府の在日朝鮮人支配政策は当初より「在日朝鮮人、台湾人は軍事上の安全が許す限り『解放国民』として処遇すべきである。…しかし、『日本国民』であつたから必要な場合は『敵国人』として処遇されてよい」（四五・二基本指令）更に「自己の順番にあたつた時祖国を抱む朝鮮人は正式に樹立される朝鮮政府が朝鮮国民として確認する迄日本国籍を保有する」（四六・二覚書）と規定されたのである。朝鮮危機が米帝を軸とする植民地支配の再編を根底から動揺させる事に恐怖した米帝は、一方で帰還ならぬ追放のどう喝を行ないながら、国籍問題を棚上げにし、「解放国民」としての処遇を徹底して抹殺した上に立つて差別・同化・抑圧への組み込みとしてある日本の国内法に従う事を強要したのである。

こうした米帝の意図を受けて日本政府はGHQ覚書「日本人以外の国民の入国及び登録の件」に基づき、占領支配下での在日朝鮮人支配の基本法規をなした「外国人登録令」を発した。「登録の対象者には一般外国人の他に平和条約発行の時までは法的には日本国籍をもつとされた『朝鮮人・台湾人』に対して当分の間これを外国人とみなす」とされ、身元を完全に掌握した上で国外追放をちらつかせ、日本の法律の適用を強要するという攻撃が加えられ続けたのである。在日朝鮮人からする「協和会手帳の再現だ」という反対の声を押して、登録が強行され五二・九・〇七名が第一時登録終了時、総司令部情報局より発表され、後の日本帝国主義の入管体制の骨格を形成した「出入国管理令」「外国人登録法」「法律一二六号」への布石が打たれたのである。

以上の攻撃を基礎にした、民族教育に対する弾圧、そして、一九四九年「団体等規制令」の適用による朝連民青に対する解散命令に至る過程は一方に、朝鮮半島に於ける大「韓」民国のデッチ上げ、（それに対決した朝鮮民主主義人民共和国の成立）として南北分断固定化の策動を進行させながら、日本人民の差別排外思想を最大限利用した上に立つて、在日朝鮮人民を米帝戦略に基づく植民地支配の再編へと組み込み、日本社会に於ける新たな分断・抑圧・追放・同化の支配構造の下で被

抑圧人民としての位置の強要を準備したのである。

しかしながら、日本プロレタリア人民はこの朝鮮人民の民族解放の闘いを、自らの帝国主義的抑圧民族としての主体的契機のうちに反省し、米帝の世界戦略への対決・復活しつつある日本帝国主義の打倒の重要な環として設定し、その統一した発展を目指すことなく再び朝鮮人民の孤立と敗北を強いたのである。

それはコミンテルン七回大会に於ける「反ファッショ統一戦線」、そしてコミンテルン解散から帝国主義との同盟へと進行したソ連共産党を中軸とする国際共産主義運動の第二インターの道への転落、その継承としてのヤルタ（分割）協定に現われた帝国主義への屈服のうちに社会排外主義を開花させ、もつて戦後革命を民族国家の枠へと絞殺したのである。この朝鮮人民の孤立を招いた戦後革命の敗北はソ連共産党の裏切りと日本共産党及び日本プロレタリア人民の排外主義的腐敗に起因するのである。

在日朝鮮人運動と戦後革命の敗北

日本共産党は、在日朝鮮人民の運動を指導しつつも、そこでは、在日朝鮮人民の闘いを軽視し、日本人民の闘いへの合流をのみ一面的に強調するという一貫した指導の誤りに貫かれていたのである。そこでは戦後日帝が過去の植民地支配、侵略戦争の責任を米帝が主導した新たな反革命世界秩序作りに積極的に加担することをもつて帝国主義的に清算したごとく日共はその事の一切を帝国主義の責任に帰し日本人民も朝鮮人民も日本帝国主義の被害者であるという図式のうちに帝国主義的抑圧民族としての責任を清算したのである。

一九四七年二・一ストの敗北から政令二〇一攻撃を契機として日本に於ける米占領政策は反共主義へと転換を遂げ、ドルーマン・ドクトリンの下で、日帝の帝国主義的復活と国際反革命同盟の形成を目指してマーシャルプランが実現されるのである。この過程は下山、三鷹、松川事件等のフレームアップ攻撃、四九年百万人合理化、そして五〇年レッド・パージへと至る労働運動への反動攻勢が全面化し、民同の育成と労働運動の排外主義化が進行し、四九年総選挙に於ける吉田内閣の登場をもつて日帝は帝国主義的基礎を打ち固めたのである。

とりわけ、米帝の四七年「国連監視下に於ける総選挙」の朝鮮半島南半部での強行→四八年「大韓民国」デッチ上げ、南北分断の固定化の攻撃と歩調を合せ、在日朝鮮人運動に対しては弾圧が集中したのである。

民族教育の圧殺をめぐる大阪、神戸事件、そして「団規令」に基づく朝連の解散、指導部の公職からの追放、財産の没収と日本政府は徹底した民族的抑圧を在日朝鮮人民に集中させた。この過程に対し有効に対決するどころか日共は、激烈に展開される在日朝鮮人民の闘いを「一口に言えばこれらはすべて民族的特殊的な利益擁護の闘争であつて」としか評価せず、民族的偏見を排除することを朝鮮人民に要求するという転倒した上に、天皇制打倒・人民共和国樹立、いわゆる「占領下の平和革命」路線における議席の伸長という目からしか在日朝鮮人民の闘いを問題にしなかつたのである。戦後世界の再編に伴う帝国主義の攻撃は四九年を頂点として戦後革命運動に潰滅的な打撃を与え、日共の在日朝鮮人運動に対する排外主義的対応は朝鮮戦争への道を開くものとしてあつた。

一九五〇年、コミンフォルム批判を契機として日共は所感派と国際派の分派闘争が開始され、五〇年六月朝鮮戦争の開始と機を一にして、日共中央委二四名の追放、アカハタ発行停止処分、レッド・パージ攻撃と一挙的反動攻勢の中で試練に立たされた。

一九五一年、五一年綱領「日本共産党の当面の要求―新しい綱領」が採択され、その下で「軍事方針」へと路線転換をとげる。

五一年綱領は占領制度下の民族民主革命として権力規定の決定的誤りの上に、いわゆる植民地革命綱領として定式化された。この方針の下で中核自衛隊が組織され、一九五二年二・二一反植民地デーに於ける蒲田事件をはじめ、京都事件、さらに五・一メーデー事件、六・二五吹田事件、七・七大須事件へと武装闘争が展開された。

一九五一年朝連解散後、在日朝鮮人民は在日朝鮮統一民主戦線を結成し、その武装中核とされた祖国防衛委の下に祖国防衛隊を組織した。

朝鮮戦争という現実を前に在日朝鮮人民は、朝鮮半島に於ける「民族の悲願」をかけた同胞の闘いに呼応し、日本人党員とはくらぶるに値いせぬ程の犠牲を払いつつ、武装闘争の主力を担つたのである。日共は、祖国防衛隊を中核とする在日朝鮮人民の闘いに対する指導を五一年綱領に基づいて行なつた。そこでは五一年綱領が孕んだ決定的限界に規定され、帝国主義批判に基づく自らの主体的立場の措定を完全に放棄した上で、米占領軍及び吉田政府を「共通の敵」へと平板化した上で、民族的主体性を「祖国の人民の闘いに便乗するような傾向」と逆に圧殺し、「日本人民との団結」の一面的強調をもつて、五一年綱領の枠へと在日朝鮮人民の闘いを封じ込めんとしたのである。

そしてこの誤りは、有名な「六全共」に於ける路線転換のうちに、後の「自主独立路線」へとつらなる、「内政不干渉」の立場への乗り移りとして総括されることなく清算されたのである。

社会排外主義まる出しの第一回総評大会、「国連軍支持」「北朝鮮武力侵略反対」という社会党の朝鮮戦争不介入方針及び日共のこの誤りに示される日本プロレタリア人民の腐敗は入管体制の法制的整備、国外追放等排外主義的弾圧に有効に対決しきれず在日朝鮮人運動に余りに大きな犠牲を強いたのである。

そして、戦後日本階級闘争がこの敗北を出発とし、今日の日本労働運動の社会排外主義的堕落・腐敗の全面的進行、日本帝国主義の差別排外主義・人民分断攻撃への屈服の道を決定付けるのである。在日朝鮮人民の解放闘争への連帯を問題にする時、日本プロレタリア人民は自らの帝国主義抑圧民族としての主体的立場への反省のうちに、日本革命に於けるプロレタリア国際主義の核心を問う問題として措定しえぬ限り、社会排外主義的腐敗との訣別は絶対に不可能なのである。

第三章　朝鮮植民地化攻撃の開始と入管体制の展開

中国革命の勝利・朝鮮解放闘争の前進に示される帝国主義の戦後アジア支配の危機に直面した米帝は、一九五〇年反革命巻き返しをかけて朝鮮戦争を貫行した。米帝はこの戦争に於ける朝鮮人民軍・中国義勇軍の抵抗の前に「米陸軍史上、最大の敗北」を喫し、朝鮮の反革命統一という野望は完全に粉砕された。

約三年間の間に朝鮮の八〇％を焦土化したこの戦争は日本・沖縄を最大の補給後方基地として実現された。朝鮮人民の流血によりもたらされた「三〇億ドル」以上の「朝鮮特需」をもつて日本は一気に帝国主義的復活を実現する。日帝はこれを「天祐神助」「神風」として受け入れたのである。

一九五五年迄に戦前の生産力水準を突破し経済的復興を完了した日帝は、警察予備隊→五四年「自衛隊」の形成を通じて再武装を遂げ、六〇年岸内閣の下での「日米安保」の再編をもつて「侵略反革命への基礎を形成する。

日帝は、その侵略反革命の突破口を再び朝鮮半島に求めたのである。「冷戦」からフルシチョフ体制下「平和共存」の路線転換の中で、国際反革命を基礎とした植民地支配体制の確立という米帝反革命世界戦略の再編、南北分断固定化の進行に歩調を合せ日「韓」閣僚会議が開始される。日「韓」会談に対して日帝は「『韓』国側が日本の植民地統治にたいする賠償を云々するのであれば、日本側としても日本が朝鮮の経済力を培養した事実を指摘せざるを得ない」（日本側首席代表久保田発言）という帝国主義的ひらき直りと侵略思想を前面に押し出して臨んだのである。帝国主義の植民地支配、南北分断固定化の攻撃に対する朝鮮人民の怒りは、六〇年四・一九人民蜂起として爆発し、李承晩ライライ政権を打倒した。「行こう北へ！来たれ南へ！」「会おう板門店で！」のスローガンの下に、学生を先頭とする「南北統一要求」の闘いが大規模に南朝鮮全土をおおつたのである。

これに恐怖した米帝は六一年軍事クーデターを策謀し、南朝鮮人民の政治的自由と人権を完全に抹殺した朴反共軍事独裁政権を成立させ、南北分断固定化へのより一層の横杆入れを行つたのである。朴は「反共法」等の治安立法をたて続けに施行し、南北統一要求の闘いを徹底的に封じ込め「『韓』国中央情報部」の下に「『韓』国を『一切の民主主義的自由と権利を抹殺された暗黒世界に、人民大衆へのテロルと大量虐殺が強行されている人民虐殺場にかえた」（六一年朝鮮労働党四回大会・金日成報告）のである。

ベトナム民族解放革命戦争の前進にともなう米帝の軍事介入の拡大は極東に於ける反革命の支柱として日帝の登場を要求した。帝国主義の軍事援助、経済援助によつてやつと支えられた朴反共軍事独裁政権は、強引な外資導入に基づく工業化政策によつて日帝の植民地化攻撃により積極的に道を開いたのである。朝鮮人民の日「韓」会談反対の闘いによつて

う余曲折を繰り返してきた「会談」は十四年間を経過して、日本・朝鮮を買いて猛烈に展開された朝鮮人民の反対闘争に徹底した反革命テロルをもつて臨み強引に妥結されたのである。朴―佐藤の間で調印された「日『韓』基本条約および諸協定」は、日帝の朝鮮植民地支配の責任の完全な清算と共に、朴反共軍事独裁政権を朝鮮に於ける唯一の「合法的」政権と認めたのである。これは南北分断固定化策動へのより直接的な日帝の登場を意味したのである。

一九五〇年朝鮮戦争から六五年日「韓」条約に至る一五年の過程は日帝の帝国主義的復活、そして国際反革命同盟を基礎にした朝鮮植民地化攻撃の開始として、米帝の侵略反革命戦争政策を世界的支柱としつつ、日帝の帝国主義的発展の踏台として再度朝鮮に対する侵略反革命の開始を位置付けたのである。その事は在日朝鮮人支配のうちに反映され、帝国主義的差別・分断・抑圧・同化・追放攻撃の体系的確立を見る時期でもあつた。朝鮮戦争を契機とした「入管令」「外国人登録法」「法律一二六号」をもつて日帝は現行入管体制の基礎を確立し、民族教育の弾圧にみられるごとく民族的主体としての登場の初発的契機さえをも奪い尽し、「同化か追放」の二者択一のどう喝の下に、帝国主義国内に於ける被抑圧民族としての位置を強要したのである。

入管体制の法制的構築と日本人民の立場

一九五二年四月二八日「対日講和条約」にもとづき、外国人（朝鮮人・中国人）管理支配体制の法制的整備を行なつた。

一占領下の外国人管理の軸をなした「入管令」「外国人登録令」は「ポツダム政令」としてあり、サンフランシスコ講和条約の発行に伴い、前者は法律一二六号四条（一九五二・四・二八施行）により法律としての効力がなえられ、後者は新たに外国人登録法の施行により、登録令の中の入管令重複部分が整備され廃止された。

こうして、一九六五年「日『韓』法的地位協定」「入管特別法」の介在の後も、入管令登録法、一二六号は入管体制の柱として君臨している。

◎入管令はおおよそ次の外国人管理の内容を規定している。(イ)旅券、乗員手帳の所持（三条）(ロ)在留資格（四条）(ハ)上陸拒否　(ニ)退去強制（二四条）(ホ)退去強制手続（二七―五五条）とされ、とりわけ注目しなければならないのは、強制退去制度の中に外国人管理の治安弾圧的性格が集敵されているという事である。在留資格制度は、まずもつて上陸を選別し、更に上陸を許可した上で強制退去制度で在留中の活動を管理するのである。退去強制事由で特に注目すべき事由は、△不法入国、不法上陸　△不法残留　△資格外活動をもつぱら行なつていると認められる者　△らい病「精神障害者」、貧困者等の公共負担者　△外国人登録令に違反して禁錮以上の刑に処せられた者　△少年法に規定する少年で長期三年をこえる懲役または禁錮に処せられた者　△無期又は一年を越える懲役もしくは禁錮に処せられた者　△不法入国、不法上陸をそそのかしまたは助けた者　△暴力主義破壊活動団体政党のメンバー、治安撹乱団体またはこれと密接な関係を有する者　△前に規定した政党団体の目的を達するため文書図画を作成・頒布・展示した者　△その他法務大臣が国益・公安を害する行為を行なつたと認定する者、等である。

入管局の運用の実態は、「国際法上の原則から言えば、兼て食おうと焼いて食おうと自由なのである」（法務省入管局付検事池上務発言）というむき出しの民族排外主義をもつてする任意的な行政優位の下に行なわれるのである。「入管令」違反に問われた者に対する「特別在留許可」も法務大臣の自由裁量にまかされているのである。

◎「登録法」は、登録をもつて在留外国人の全生活過程を掌握し、日常的監視体制の下に組み込むものとしてあつた。なおかつ証明書には指紋の押印が義務付けられ在日外国人（朝鮮人・中国人）を潜在的犯罪者としてとり扱うのである。そしてこの中には、差別の証明書たる登録証明の携帯義務、呈示の義務（拒否権の否定）が義務付けられているのである。これに対する違反は入管令強制退去制度（二四条四号）にふれ、日常の単純な過失をも追放の対象とされるのである。

◎「法律一二六号」は、講和条約の発効によつて日本国籍を失なつた在日朝鮮人に対し、「昭二〇・九・二以前から昭二七・四・二八まで引き続き本邦に在留する者（その子で昭二〇・九・三―昭二七・四・二八までに出生したものを含む）に対し」「別に法律で定めるところ」により「その者の在留資格及び在留期間が決定される迄の間、引続き在留資格を有することなく在留できる」として在留期間に関しては入管令の適用から除外し、「在留資格なしで登録法のみ適用される」建前としたのである。なお、一二六―二―六該当者の子で昭二七・四・二八以後に出生したものは「特定の在留及びその期間を定める省令」（外務省令一四）によつて「在留期間三年」と限定したのである。この様な取り扱いの結果、親子の間にも在留資格・期間の分断が持ち込まれた。

「一二六号は、アジア人民の闘いの前進を背景に在日朝鮮人民・中国人民の闘いと要求に対し過去の植民地支配の責任を曖昧し、欺まん的に収拾・分断する措置として実現された。在留権の「容認」は在日朝鮮人民の歴史的存在と闘いを無視しえなかつた事の法制的表現なのである。

にもかかわらず一二六―二―六該当者に於いても、在留資格、期間、活動を除いて入管令の適用を受けるのであり、先に挙げた「入管令二四条」の事由にもとづき「一二六号資格の剥奪、追放の道を残しているのである。

つまり、在日朝鮮人民が克ち得た法的根拠たる一二六号的在日形態を「入管令」「登録法」により制約しつつ、強制退去、追放攻撃を準備するという形で入管体制の体系を展開するのである。

◎一九六五年、日「韓」条約の締結と「一体化」して日帝―朴体制の構築に見合う在日朝鮮人抑圧・管理支配の強化を目指すものとして「法的地位協定」が結ばれたのである。その中で「大韓民国国民が、この協定の実施の為、日本国政府の定める手続に従い、この協定の効力発効の日から五年以内に永住許可の申請をしたときは、日本国で永住することを許可する」（一条）としたのである。

法的地位協定に基づき、永住資格を申請した者には日本政府の厳重な審査を必要とし、申請者が審査の結果永住資格からあらかじめ排除されている戦後の一時帰国者や戦後入国者である事が判明した場合一二六号の在留資格剥奪の攻撃を受けるという一層の管理体制への組み込みが行なわれるのである。

一時帰国者、戦後入国者が「一般永住権」を申請したとしても、就職差別等によつてその多くが潜在的失業状態を強いられている在日朝鮮人にとつては「素行善良、独立した生計を営むに足る資産、技能」「その者の永住が日本国の利益に合すると認めた時許可する事ができる」という限定された条件の下ではほとんど実質的意味を持たないものである。

日帝の植民地支配による犠牲、苦難の歴史を背負つてきた約六〇万在日朝鮮人民は戦後も一貫して民族抑圧の下に置かれ、日本人民の偏見・蔑視による劣悪な労働条件、就職差別等の社会的差別を受け、日本社会の底辺に呻吟せしめられ、経済的貧困を余儀なくされている。在日朝鮮人の七六％が無職者とされその殆どが潜在的失業状態に陥し込められている。加えて、納税負担は日本人と同等の義務が課せられ、社会保障は「外国人は法の適用外」とされ、わずかに生活保護、一部の地域に於ける国民健康保険が認められているくらいのものである。その生活保護も一九五六年「朝鮮紅伐」と称する生活保護の引きしめの結果、保護率の激減を招いているのである。加えて生活保護を受ければ受けたで強制退去の理由とされるのである。こうした構造―攻撃をもつて民族差別・抑圧の下に在日朝鮮人民を固定化し一方に強制退去のどう喝を行ないながら、生存の為の最底の条件をも奪い去らんとするのである。そしてこの攻撃を支え増幅しているのが日本人民の蔑視・偏見にある事を忘れてはならない。

法的地位協定に於いては、強制退去事由、処遇問題について「大変な譲歩である」とひらきなおり的「恩恵」措置を行なつたのである。この策謀は「韓」国籍を取らなければ生存できないような社会的抑圧の下におかれている在日朝鮮人民を国籍書き替えへとかりたて「日『韓』法的地位協定」の貫徹をねらつたのである。

法的地位協定は、在日形態のより一層の多様化と共に在日朝鮮人民を朝鮮籍と「韓」国籍へと分断し、つまり南北分断固定化の在日朝鮮人内部への持ち込みの拡大としてあつた。同時に「韓」国の「兵役法」「反共法」「国家保安法」が「韓」国籍を有する在日朝鮮人に適用する道が開かれたのである。

法的地位協定に基づく四項の強制退去事由は、いくらでも恣意的に拡大解釈され、「悪質『韓』国人の本国送還の道を開いた事は大きな前進である」（藤名孝吾）という言葉が如実に物語るように追放攻撃の強化とそその意図する処であつた。つまり「永住権」その他の歌唱的「恩恵」による「韓」国籍書き替えへの動誘は、日帝―朴体制の二重の支配の下に在日朝鮮人民を組み込まんとするものであつた。

六五年日「韓」条約は日帝の帝国主義的展開に新たな段階を画するものとしてあつた。そして今日の南朝鮮に対する植民地化攻撃はすさまじいものがある。七〇年代、帝国主義の世界再分割戦への突入の中で日帝の朝鮮植民地化攻撃はその延命にとつて絶大な出血を高めつつ南朝鮮の政治・軍事・経済・社会を大きく把え尽さんとしている。

第四章

入管体制攻撃の現段階と我々の任務

日「韓」条約、日「韓」法的地位協定は、「『韓』国を唯一の合法的政権」とする事によつて在日朝鮮人民の「国籍選択の自由」の剝奪を迫り、日帝―朴体制の下に在日朝鮮人民をガッチリと組み込まんとする攻撃であつた。六五年以降の様々な攻撃は一二六号的在日形態の実質的否定をねらうものとして在日朝鮮人総体を法的地位協定の枠へと縛り付けんとするものであつた。七一年一月十六日「協定永住権」の申請期限切れをもつて日帝はこの攻撃を一挙に実現せんとしたのである。国際階級闘争の攻勢的前進により、又々米帝戦略が破綻せしめられんとしている今日、絶望的侵略反革命を遂行せんとする日帝にとつて、入管体制の圧倒的強化は侵略反革命体制作りに於ける決定的環として位置しているのである。日帝はこの入管体制の完成を入管法の実現に求めたのである。

今日、侵略反革命体制は統治形態のボナパルチズム的転換という中で、天皇制・天皇制イデオロギー攻撃の新たな質を展開してきている。日本プロレタリア人民の排外主義的育成、民族的差別抑圧への動員、そして朝鮮半島の解放闘争に合流して闘われる在日朝鮮人民の闘いを完全に封じ込めるものとして、その一切を託して入管法・入管体制の今日の攻撃がある。そしてこの攻撃は政治的側面のみならず在日朝鮮人民の生活権、生存権、民族的意識、その精神形成の過程まで含めて奪い去らんとしているのである。

戦後一環して民族教育に強権を発動したごとく、言語を奪い祖国の歴史を学ぶことを奪うことは在日朝鮮人民の八割をしめる二世三世にとつて民族的主体としての自己形成を実現する拠点そのものをも剝奪せんとする攻撃なのである。

徹底した同化攻撃を在日朝鮮人支配の大きな支柱としつつ、強制退去の刃をちらつかせながら更なる差別と抑圧のくびきの中で在日朝鮮人民を「物言わぬ主体」へと陥し込めんとしているのである。

民族抑圧の戦後的構造はこの様なものとして実現されてきた。そして入管法・入管体制攻撃は戦後入管行政の最集約表現として、国際階級情勢の展開に対する反革命攻勢の質を体現し、日帝の朝鮮植民地化攻撃・侵略反革命体制作りのうちにガッチリと位置付けられているのである。これは戦後三〇年の入管行政の蓄積の上に実現され、又過去六度に亘る国会通過を阻止され続けてきた日帝はそのたしくすし的実体化を為すものとして現行入管体制の強化を押し進めている事を忘れてはならない。

新入管法の概要はa出国・入国・上陸の規制、弾圧の強化、b再入国規制、祖国自由往来の権利の剝奪、c在留資格外活動の全面的規制・禁止・抑圧、d遵守事項の新設による退去強制事由の無制限的拡大を通じた在留活動への全面弾圧、大量追放体制の確立、e退去強制手続の簡素化、f特別在留許可制度の改悪、g日帝―朴体制の下での送還先の恣意的指定、h収容制度の改悪（特別放免制度の廃止、面会の制限・禁止条項の廃止等）i行政調査権の新設をもつてする監視・弾圧体制の強化、j入管行政処分の密室化等、入管行政の全般に亘る改悪として実現されんとしている。

とりわけ注目しなければならないのは遵守事項の新設をもつて在留活動の範囲を細目化し、同時にその事項の拡大については法務大臣に委任され、強制退去事由は無制限に拡大可能となつたのである。この制度的確立の中に大量追放体制・弾圧体制の完成をはつきりと見る事ができる。資格外活動の全面規制・禁止の攻撃は就職活動・バイト等の報酬活動を奪う等の攻撃をかけ生活・生存の基礎そのものの範囲に対する規制の強化を大きく進めんとしている。しかも他方で「生活保護→強制送還」という道が存在するのである。

更に、在日朝鮮人民の闘いに対する治安弾圧・予防反革命的性格の環をなすのが行政調査権の新設である。これまでも、先に見てきた様に在日朝鮮人民に対する日常的監視体制は、登録法による登録証の携行・呈示の義務、黙否の否定、協定永住申請に対する審査に名を借りた治安弾圧的調査等様々な監視網を張り巡らしてきた。今度新設されんとする行政調査権は調査の根拠、目的、対象が極めて漠然としか規定されておらず、それはほぼ無制限に可能とされるのである。それが入管当局・外事警察の立ち入り調査を可能とするのみならず、日本人総体の偏見・蔑視を動員しつつ日常監視体制の飛躍的強化が目指されているのである。

以上の内容の底流に流れるのは、在日外国人は「煮て食おうと焼いて食おうと自由」という排外思想なのである。

入管法―入管体制攻撃を粉砕せよ!!

帝国主義の寄性と腐朽の進行、それと非和解的に対決し、糾弾し抜いて闘う在日朝鮮人民の闘いの前進は今日、帝国主義にとつて最も恐怖すべき事態なのである。そうであるが故に、七〇年代中期～後期に於ける統治形態のボナパルチズム的転換という日帝の侵略反革命体制作りに向けた階級支配の構造的転換確立のうちに新たな反革命攻撃の質を在日朝鮮人支配の中に先行的・集中的に体現してきている事をはつきり見据えねばならない。

まさに七〇年代中期以降の侵略的反攻戦の貫徹をもつて権力との攻防局面を大きく転換させんとする時入管法・入管体制との対決は不可欠の課題なのであり、同時にその闘いは国際主義の内実を厳く問うものとして闘いの質を要求しているのである。

部落差別、沖縄人差別、朝鮮人差別、女性差別、「障害者」差別の圧倒的強化・拡大に無自覚ならば、又在日朝鮮人民の闘いに連帯し抜くことを血肉にかけて貫徹する事抜きには、帝国主義の差別排外主義・人民分断攻撃の前にいかなる闘いも無力と化す事を肝に銘じなければならない。そしてこの差別排外主義・人民分断攻撃が抑圧される者内部にまで差別・抑圧を持ち込んだという歴史的事実を見る時、在日朝鮮人民の闘いへの連帯は闘う者一人一人の階級的位相、そこに内在する思想の根底を鋭く問う事抜きには不可能なのである。

在日朝鮮人民の歴史は差別と抑圧、迫害の歴史としてのみあつたばかりでなく、それは民族の解放に向けた闘いの歴史として日帝に対する鋭い糾弾のエネルギーを実現してきた。朝鮮半島に於いては、六〇年四・一九人民蜂起、六一年南北統一要求の爆発のエネルギーは六五年「日『韓』条約」批准に対する二〇万七〇〇〇名の朝鮮人民の決起として再度朝鮮半島を揺がした。

この闘いの烽火に呼応して在日朝鮮人民は、朝鮮総聯、「韓」青同等の組織を先頭に「日『韓』条約」「法的地位協定」の粉砕に向けた巨大なうねりを形成した。それは、入管法に対する闘いへと継続され、再三に亘る上星策動を粉砕し去つてきた。

この在日朝鮮人民の闘いと叫びを糾弾として受けとめ再び日本プロレタリア人民への不信と締め、闘いの孤立と困難を朝鮮人民に強いてはならない。

朝鮮人民の闘いと歴史を学び、生活的権利、政治的権利、民族的権利獲得の闘いに無条件に連帯し、防衛し、入管法・入管体制粉砕の闘いを戦略的環としつつ、日帝打倒の戦略的水路の中にこの闘いの一切を位置付けねばならない。

七・七華青闘告発は日本階級闘争の質を一人一人の主体の内実・思想のうちに問うたのである。それは七〇年安保闘争を激烈に闘い、七〇年代を権力闘争の時代を開くものとして措定せんとした時、そこに孕まれた国際主義の内容が、被抑圧人民の闘いへの連帯を自らの主体的位相への反省を媒介に把え返すことを忘却してきた事への糾弾としてあり、同時に被抑圧人民の闘いを客観的に賛美することはあつても、その闘いへの実体的連帯・結合をもつて階級闘争の飛躍を実現しえなかつた事に対する啓発としてもあつた。

七〇年代が被抑圧人民の闘いに象徴される様に、国際階級闘争の更なる攻勢的前進のうちに刻印され、それが帝国主義の反動攻勢を侵略反革命（戦争）・侵略反革命体制作りの一層の強化として引き出してきている段階に於いて、かかる内実をもつてプロレタリア国際主義を闘い取る事は自国帝国主義打倒に向けた戦略的反攻戦の緊急の任務として位置しているのである。

インドシナの完全勝利の局面は、日帝―朴体制のうちに国際反革命の集中的展開を引き出さんとしている。日帝の朝鮮植民地化攻撃は文字通り日帝の死活をかけた攻撃として、朝鮮人民に一層の重圧を強いている。それは国際階級闘争とりわけアジアに於ける民族解放闘争の怒濤の進撃に対する最大の歯止めを形成する事を目指しているのである。

日帝・朴は六月日「韓」関係会議にその展望を見い出さんとしている。その事が朝鮮人民の更なる憤激を招くことを見越した日帝は、朴の三、四月反動攻勢に歩調を合せつつ、今国会に「外国人登録法」の改悪を上程した。朝鮮植民地化攻撃と一体化した入管体制の強化を絶対に許してはならない。六月日「韓」閣僚会議粉砕・「外登法」改悪阻止に向けて闘いの大爆発を準備しようではないか！

昭和六拾年
十二月拾日印刷
十二月拾五日発行
非売品
「少年雑誌」同人会
「ゆうの会」
東京都豊島区目白台一丁目三番三号
「日曜会」
東京都小金井市
「ポプラ社」
東京都千代田区
「ポプラ社」